魔王は想う、勇者は求む

満月氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王は想う、勇者は求む

【Ｎコード】
Ｎ９６３９Ｍ

【作者名】
満月氷

【あらすじ】
「お、覚えてろよーっ！」「あー、はいはい。覚えといてやるから」悪役もどきなセリフをはく私。いや、悪役なんだけどね。対するは勇者。でも全然勇者らしくない発言。異世界トリップしたさきで魔王様となった女の子と、めんどくさがり屋な勇者様の男が互いに宿る『紅心の珠』と『玲心の珠』をめぐり今日も今日とて争います。「つ、次は私が勝つもん！」「そうか。勝てるといいな」でもあんまし戦わない。

序章（前書き）

初の連載投稿です！
書けなくなってしまったり、遅くなったりするかもしれませんが
頑張って最後までいきたいと思いますので、読んでいただけると幸
いです。

序章

「あ、あああなたが・・・勇者、様？」
「・・・そうだけど？」
「こ、こんにちは、魔王です！早速ですけど・・・『玲心の珠』、
も、もら、もらったぁー！」

「考えちゃいけない」
魔王は勇者に戦いを挑む
それは己の心を封じるために
ただ全てを正当に思い込むために・・・

「絶対に再会してやる」
勇者は魔王の元へ旅にでる
己の想いを裏返しにあらわしてでも
ただその心のためだけに・・・

たとえ想われなくても
たとえ伝わらなくても

あなたと対等になれなくても
君と壁があっても

想っているから・・・
会いにいくから・・・

だから信じて
だから信じろ

―1― ●魔王様の心情（1）

「お、覚えてろよーっ！」
「あー、はいはい。覚えといてやるから」

悪役もどきなセリフをはく私。
いや悪役なんだけどね。

対するは勇者。でも全然勇者らしくない発言。
そこがまた悔しい。
こんなやつに負けた！

「くそー、くそー！次こそは絶対に負かしてやる！」

今日のは悔しかった。
あとちょっとで『玲心の珠』が取れたのに！

ぞくにいうテレポートで帰った先は魔のお城
勿論、ただの人間以外がたくさんいるところ

「頑張るのもほどほどにしてくださいね。魔王のあなたが戦う前からばててしまっては話になりませんから・・・」
「大丈夫！次なる作戦はもう思いついてるから！しかも今度のは戦わないしっ」

私の言葉に侍女のシャニアさんが不安そうな顔をした～！

「ちなみにどのような・・・？」

「勇者がお風呂に入っている間にこっそり「いけません！！」」

本気で怒られた。

「まだ最後まで・・・」

「言わなくてもわかります！敵の、それも殿方である者の入浴に忍びこむなんてっ！それでも魔王様は女ですか！？乙女ですか！？」

「彼氏いない歴１７年だから一応乙女といえるかも・・・」

「そうではなくて！」

はぁーっと重いため息をつくシャニアさん。

何もそこまで否定しなくてもいいのに。

「勇者の心の部分にしばらく手をあてればいいんだよね？それだけで魔にとって最大の力であり、勇者の中に宿っている『玲心の珠』が手に入り、私は元の世界に帰って高校生活を再びエンジョイできる。簡単な話じゃない」

「簡単な話のはずなのに魔王様が召喚されてからだいぶたちますけど、いまだに『玲心の珠』が手にいれてらっしゃいませんが？」

「うっ・・・」

「だいいち、魔王様は殿方の体に数秒間ばれずに触れられますか？その根拠は？」

な、何も言えない・・・

よくよく考えてみれば歳の数だけ彼氏がいないうえに、男の人とキスはおろか手をつなぐことさえしたことがない私に裸の勇者様に触

るなんてできないかも・・・。
・・・できないな、うん。
というか絶対すぐにばれるだろう。
思わず彼の裸姿を想像してしまった。

・・・たくましいんだろうなぁ、きっと。
顔だってモロ、私のタイプだし。

勇者という呼び名にふさわしい金髪に碧眼。
ちょっと放置気味の髪は少しだけ後で縛っているが、顔は比較できないくらい誰よりも整っている。
王子様みたいな勇者様はまさしく美形、もしくは美青年。

まだ本気で戦ったことはないけどきっと強いんだよね・・・。
・・・何なのよ、あの完璧な勇者ッぷりは。
出会ってからというもの、いつも、いつも・・・。

「・・・勝てそうに、ない、かも・・・」

彼の顔を思い出すだけで頬が熱く、胸のドキドキがとまらないんだもん。

「魔王様がそんな調子では困ります。私たち魔の者のためにも頑張っていただかなくては。勇者に宿る『玲心の珠』をとれるのは魔王であるミオ様、あなただけなのですから」

・・・そう、だよね。こんなのだめだよね。
私、西野未緒はこの世界の住人じゃない。
私は地球で、何故か『紅心の珠』を宿してしまったらしく、このファグアラネルという世界に召喚され、現在、魔王をやっている。

つまり、いつかは向こうに帰る人間。
たとえ『珠』を宿しているから魔力が使えるのだとしても私の体は人間であって魔の者ではないから、『玲心の珠』を手に入れても寿命も身体のできも違う彼らとずっと一緒にいることは出来ない。

さらにいえば勇者から『玲心の珠』をとれるのは魔王だけ。
私はそれを手に入れない限り帰れない。

・・・帰らなきゃいけないのに、勇者様のこと考えちゃ駄目だよね
それに私を応援してくれる魔の者たちがいるんだもの！

「うん。よし、みんなのためにもがんばろっ！ポジティブにいく！」
「・・・ありがとうございます、魔王様。ですが気をつけてくださいね。向こうも魔王様の『紅心の珠』を狙ってきているのですから。くれぐれも・・・」
「はい、わかってます！とられないよう気をつけまっす！」

なにごとにも元気にいかなきゃ、気が落ちそう。

―1― ●魔王様の心情（1）（後書き）

地球育ちの彼女がテレポートなどの魔力を使うことができるのは、
『紅心の珠』を身体に宿しているからです。
ちなみに地球に帰ったら使えません。

○勇者様の心情（2）

「意地が悪いわよフェイル」
「何の話だフィアナ。あと勇者様と言え」
魔王が消えると同時に旅の仲間であり、義妹のフィアナが責めたてるように言う。
「あの魔王の話に決まっているでしょ。ちゃんと相手にしてあげればいいのに」
「あんなへなちょこを？真面目に相手にするだけ無駄だぞ」
「魔王とはいえ女の子があんなにも頑張って戦おうとしているのよ。それをあなたは・・・」
本気で相手にしたら多分あいつ死んじまうぞ。
武道を心得ているわけでもないくせに必死で俺の懐にはいろうとする変な魔王。
「じゃあちゃんと相手にすればいいのか？」
ぞんざいな言い方で聞き返してみた。
「それで勇者が勝つなら問題ないわ」
「なんだ。魔王の味方じゃなかったのか？」
「私は相手にしろと言っただけであって、あなたに負けろとは言ってない」
あいかわらずわかりにくい言い方をする。
それにしてもあの黒髪の女は何者なのだろう。

魔王ということはわかるがそれ以外の素性がわからない。
わかることは魔王、女、見た目は2～3年下、単純なやつ、くらいだ。

あとあいつとは戦いたくないこと。
あぁ、これは俺のことか。

「ところでなんで魔王に遭遇したときに彼女の持つ『紅心の珠』をとらないの？魔王が弱いのなら簡単でしょう？」

痛いところをつかれた。
勇者の中にある『玲心の珠』は魔王に盗られたら魔の者達の力を増幅させちまう。
逆に魔王の中にある『紅心の珠』は勇者が盗っちまえば向こうは魔力をいっさい使えなくなる。
だから、勇者は早めに『珠』をとるにこしたことはないのだが・・・。

「すぐに旅が終わっちゃつまんねぇだろうが。それにいくら魔王だからって、へたに傷をつけると手下どもに何されるかわかんねえし」

前半は建前で、後半は本当。でも手下が恐ろしいから倒さないわけではない。

そりゃ最初の頃は魔王の様子をみて、簡単なら盗ろうかと思ったさ。
俺、旅とかめんどくさいの嫌いだし。
でもあいつに何度か会うたびに「旅を続ければまた会えるかもなぁ」とか、「あの黒髪に触ってみてぇ」とか、「すれちがった時いい匂いがした」とか、「あの柔らかそうな肌に傷はつけられねぇ」とか思っちまったらもうしょうがねぇな

第一、向こうは魔力を持ってるから好きなときに移動できるけど、こっちは勇者とはいえ人間なんだ。
移動も当然歩きで、地道のため疲れることこの上ない。
それでも、めんどくさがりやな俺が行くのはあいつに会うため。勇者として魔王に会うのではなく、フェイルという者として彼女に会う。会いたい。

・・・そういえば俺は彼女の名前を知らないな。
もっと彼女を知りたい。
だがこれを口にしてはいけないことくらいわかっている。
だからこそ俺は彼女をどうでもよく扱うことにした。
そうすれば誰も勇者が敵の魔王を心に想っているなんて思わないだろう。

「・・・本当にそれだけ？」
「なんでそう思う」
「後者はともかく前者よ。・・・昔っからぐうたらのあなたが、めんどうよりも楽しみをとるですって？おかしすぎる」

一人、昔から一緒にいるやつになんとなくだが感づかれているのは気のせいか？
気をつけねえと。

「じゃあ他に何があるんだよ」
「・・・、まぁいいか。魔王と戦わずして逃げるよりかは」

何とか危機は去った・・・のか？
よくわかんねえや。

「それにしても魔王の城ってどこにあんだろうなぁ」
「それを探すための旅でしょ」
早く会いてえなぁ

○勇者様の心情（2）（後書き）

次回からは少しわけようかと思います

―2― ●警戒（1）（前書き）

今回からちょこっとわけようと思います

―2― ●警戒（1）

「そこの勇者様！今日こそは『玲心の珠』をもらってやる！」
「おー、一週間ぶりだな。魔王」

テレポートした先は勇者の現在の宿。
寝っころがりながらひらひらと手を振る勇者。
見れば服も何故かしわだらけ。
限りなくだらしなく、敵が来たというのに余裕ぶっこいてる・・・。
くそぅ、かっこいい！ときめいた！し、心臓がっ！
顔がかっこいいうえに、そのものぐささが、またたまらなくいい！
「ひ、久しぶり、です。・・・じゃなくて、今日の勝負は私が勝つ！勝って『珠』をとるの！」
運良く部屋には勇者しかいなかったので邪魔する人はいない。
「・・・ふ～ん。じゃあ盗ったら」
上半身を起こし両腕を広げる勇者様。
「へっ？」
「へっ？じゃなくて。欲しいんだろ？ほらっ」
な、何だろう。罠？
だって怪しすぎる。
近づいた私を相殺！・・・とか。
・・・ま、まさかね。

・・・で、でもホントにくれるのかな？
本当は勇者様はいい人で、私に譲ってくれるのかも。
だとしたらこんなチャンスない！

そろりそろりと私は警戒している猫のごとく、時々彼の表情をうかがいながらも近づいた。

あと、少し・・・もうちょっと。
ちょっとづつだけど確実に近づいていく。
・・・ここからなら、届く。
あとは彼の真ん中あたりに手を伸ばして数秒待つだけ。
それだけで『玲心の珠』が・・・。
その時は彼に多少勝った気でいて油断していた。

勇者はゆっくり出していた私の手をいきなり掴み、自分のほうへ引き寄せる。
ふぇっ！？うそ、うそ！やっぱり罠だったの！？
私は彼の腕の中で捕らわれた。

●警戒２（２）

「・・・っ！と、とっちゃだめぇ！」

『紅心の珠』をとられちゃったら魔の者のみんなに顔向けできない！
しかも離れようともがくけど腕の力が強すぎてあんまり効果ないし！

っ！・・・・・、・・・・・・？

あ、あれ？いつまでたっても何にも起こらない。
あれ？私は、彼に、腕を掴まれ、引き込まれた。
つまり・・・これは、抱きしめてる？
一方的だけどこれは抱き合ってることになるの！？

「な、ななななんで何をこのような状況が！？」

わ、私こんなふうに、男の人と抱き合う・・・なんて、したことないっ。
多分このドキドキは伝わっていると思うのに腕の力は緩まないし！
って、きゃーっ！か、髪っ、私の髪さわってるぅー！

「あ、あああの。勇者様！？なに、なにぃー！？」
「んー・・・？いや、うん。・・・あー。やっぱり」

私が聞いてるのになんで一人でしゃべるのー！

「ところでなんで勇者様？」

・・・本当に自由な勇者だなぁ。なんか一気に脱力しましたよ。

「・・・秘密っ」

王子様みたいにカッコいいからなんて理由、馬鹿にされるに決まってるもん。

「・・・ふ～ん。まぁいいや聞くのめんどいし」

そう言うとまだ離す気はないらしく相変わらず色々と触っては一人で納得している。

私に障ってもなんにもでないですよ。というかなんで触るの？

たまに勇者様のすること、よくわかんない。

・・・でも、まぁ、嫌じゃない。

むしろ勇者様のほうから私に触ってきてくれるのがすごく嬉しい。

勇者様の手、冷たくて気持ちいぃ～。

私にさわって。私を見て。私に話しかけて。

勇者様に会うたびに私の中の欲望がどんどんあふれ出てきている。

この前あきらめるって決めたのに、まだあきらめきれない自分がいた。

だって、やっぱり辛い。勇者様と戦いたくない。

あなたに嫌われたくない。

あなたが女性と話すのを見るのが苦しい。

・・・特にあなたの仲間のあの金髪美少女と。

だからお願い、今だけ。それだけでいいから。

二人しかいない今だけでいいから私を・・・

「・・・もっと・・・ちかくで」

ドタドタッガチャン！ドンドンガタ！

「おい！フェイル！無事か！？」

「いたら開けなさい！だめなら強行突破するわよ！」

・・・勇者様の、仲間。

・・・幸せの時間は、終わり。

どんなに私が望んでも人間からしてみれば私は勇者の『珠』を狙う悪者。

私は魔王　あなたは勇者

私はあなたの拒絶が怖い。

だからこの思いは伝えない。

「・・・次こそは、勝つからね・・・」

自分の声が思っていたよりも暗かったことに、びっくり。

不審に思われちゃうね。笑顔、笑顔！

「だから、その時ちゃんと戦ってよね！」

すでに彼は拘束をといていた。

と、急に静かになったのはドアをたたく音が止んだから。

・・・来る。

私は初めて彼の顔もみず、黙って逃げた。

彼もしゃべらないのはきっとめんどくさいからだろう。

・・・いつも、そうだから。

○お暇（3）

「・・・じゃあ部屋に戻るけど。何かあったら絶っっっ対に叫ぶのよ」

うるせぇ・・・。俺は子供か？

「わかってるよ。早くあっち行けっ」

「まったく・・・。どうして皆と同室にしないの。そのほうが安全なのに・・・」

ぶちぶち言いながらフィアナはようやく出て行った。

そんなことしたら魔王が警戒して寄ってこなくなるだろうが。

一人になりたがるのはより高い確率で魔王と二人きりになるためということはもちろん口にはしない。

とりあえず念のため鍵閉めておくか。

「・・・・・・・・」

暇だ。

魔王の出現を待っている間一人になるということは、当然話し相手はいない。

剣の手入れも防具整備も終わったし、これといってやるべきことはだいたいやってしまった。

昼寝するにも寝てる間に魔王が来て帰ってしまってはいけない。彼女なら勇者が寝てたら気を使って帰るだろう。

かといって外に出ても一人になった意味がないし荷物整理も筋トレもなんとなくやる気はしない。というかめんどい。

・・・何もする気がおきねぇ。

○お暇（3）（後書き）

すみません。区切ってたらかなり短くなってしまいました！

○意向（4）（前書き）

勇者様の心の声なのであんまし喋ってません。

○意向（4）

色々と考えたすえにごろごろすることにした。
そして俺は文字通りごろごろと部屋の中を転がる。
じっと考えて暇を持て余すよりも動きながら考えようと結論づいたからだ。
自慢じゃなくない（つまり自慢だ）けど俺はちょっとやそっとじゃ目を回さない。
壁にぶち当たる直前で止まり逆方向に動こうとしたとき、ちょうどよく魔王が来てくれた。
出会えた喜びと、暇からの解放から俺の心は弾む。顔には出さずに。

「おー、一週間ぶりだな。魔王」

久しぶりに見た彼女は相変わらず可愛らしい。
どこか緊張しているのか、俺の顔を見た途端、頬を染めながらも挑戦してくる姿は、他のやつらが彼女をどう見てるか知らないが俺には愛らしくみえてしまう。

「ひ、久しぶり、です。・・・じゃなくて、今日の勝負は私が勝つ！勝って『珠』を盗るの！」

『玲心の珠』をとられたら国のやつらに怒られるじゃ済まないことになっちまうから渡すことは出来ない。
これは魔王も同じだとは思う。
・・・待てよ？これを利用すれば・・・。

「ふ～ん。じゃあ盗ったら」

俺は起き上がると両腕を全開にした。

「へっ？」

魔王が驚きで止まるのも当然だろう。敵が宝をあげるなんて絶対にありえない。
それには必ず裏があるため、普通は信じないだろう。
俺だったら疑うね。それか疑う前にぶっ倒す。
だが警戒しながらも近づいてくる魔王を倒すなんて出来るわけがない。
魔王が近づく様は小動物みたいで可愛らしい。

俺が魔王を待ち構えているのは確かめたいことがあるため。
もちろん『紅心の珠』を盗ろうとかはおもっちゃいない。
ゆっくりとだが俺の目の前にまで来た魔王。あとは彼女を捕らえればいいだけだ。

それだけなのだが俺はその時の魔王に少し疑問を持った。
というのも彼女の手が震えていたのだ。
その震えは最初『玲心の珠』を前にした緊張だと思ったが、彼女の顔は悲しみと恐怖と希望というなんとも微妙な顔になっていた。
緊張はそんなにはないようだったが、その顔に彼女自身は気づいていないようだった。
喜ぶにしては明らかに嬉しそうではないし、かといっていらないというような感じでもない。
とても大事なものが他の人の手に渡ってしまい、それを勝手に盗んでもいいのかためらっている。そんな顔だったのだ。

とっさに俺は彼女の腕をとり自分のほうへ引きずり込む。本当は慰めたいのだが、今の俺の立場上それはできない。

俺の気持ちをこいつに暴露すれば確実にこいつは態度に出る。
そしてそのまま第三者に知られるのは非常にまずい。
というわけで俺には何も出来ないが気づかれない程度には何かしてやりたかったのだが。

魔王の匂いを嗅いでしまった途端考えていたことが色々と吹き飛んでしまった。
魔王が何か言っているが聞こえない。
前々から彼女から匂う香りは良いとは思ってはいたが、香水の感じはしない。
ついでに髪にも触ってみたが彼女の長いようで短い黒髪も触り心地がいい。
どれも天然ものだった。

「やっぱりなぁ」

魔王が何か言っているが気にしない気にしない。

○勇者の葛藤（5）

俺は前々から聞きたいことがあった。

「なんで勇者様？」

彼女の名前を聞くという問題もあったが、とりあえずこっちを先に。
俺は普通に魔王と呼ぶが今彼女は明らかに勇者”様”と言った。
・・・なんで？

「秘密っ」

・・・お前はどこまで可愛ければ気が済むんだ。
なんだ、ふてくされる様に言いやがって。
可愛すぎるのだが口にも態度にも出せない自分が憎たらしい。
・・・ちくしょうっ！

「ふ～ん。まぁいいや聞くのめんどいし」

魔王が明らかに落胆した。俺だってしたいさ。
悔し紛れに髪以外も触ってみた。
白い肌は思ったとおり柔らかく、彼女の身体はいとも簡単に折れてしまいそうなほどだった。
ここで結論。
俺にはこいつは倒せない。

たとえ彼女が本気で俺にかかって来たとしても
仲間たちが倒せと言っても
彼女と世界を天秤にかけても

俺は魔王を傷つけられない。

彼女が襲い掛かってきても俺は避けるだけ
怒られるかもしれないけど
フィアナやベルガやレイシューや（こいつはそんなこと言わないな）
リッツェルとかに命令されても剣は向けない
怨まれるかもしれないけど
天秤にかけたとしても俺は絶対に彼女を倒すことなんて出来ないんだ。

・・・どうすりゃいんだよ。
なんで俺は勇者なんだよっ。
なんで彼女が魔王なんだよっ。
こんな、こんな頭触るだけで嬉しがるようなやつ倒せるわけねえよっ！

・・・・・・、・・・だが、倒さなくてもいい方法がある。
簡単な話だ。先に『珠』を奪っちまえばいいだけ。
こうすれば魔の者達以外は全員万々歳になる。
なるのだがこれには不安要素がいくつかある。
もしも『紅心の珠』を盗れば、その後どうなるんだ？
魔王や魔の者達の結末に対してはどの研究者にも想定できないことらしい。

『紅心の珠』を手に入れても人間たちの平穏はあるのか？
魔力を失った魔の者達の力なき復讐はあるのか？
そもそも魔力無しで魔の者達は生存できるのか？

・・・魔王は、消えてしまうのか？

○勇者の葛藤（5）（後書き）

シリアス多めになってしまいました

○危機（6）

しばらくして魔王が静かなことに気がついた。
気が伏せっていた俺も徐々に回復。

・・・さっきまであんなに騒いでいたのにどうしたんだ？
腕の力を弱めて顔を覗き込んでみると涙目になりながらも決して流さないという意志を持った目とぶつかる。

「・・・もっと・・・ちかくで」

・・・やばい。
これ以上は俺自身も止められない。
俺が倒せなくても魔王が俺を倒すときはくるかもしれない。
けど今、この時だけは・・・

ドタドタッガチャン！ドンドンガタ！

・・・嬉しいような恨めしいような邪魔者、もとい天の助けがきた。

「おい！フェイル！無事か！？」
「いたら開けなさい！だめなら強行突破するわよ！」

名残惜しいが魔王を解放してやる。
魔王から感じた体温がどんどん無くなっていくのが少し・・・結構寂しい。
そして魔王は去っていった。消えて行ったとも言うが。
捨て台詞を残し。

――次こそは、勝つからね
――だから、その時ちゃんと戦ってよね！
気のせいか声が沈んでいたような気がする。
次に発した声も空元気というやつだった。
・・・俺なにかしちまったかな？
考えてる間に魔王が行ってしまって声をかけることすら出来なかった。

「まったく鍵なんか閉めて！どういうつもりよ！」
「・・・あ、あぁ、閉めたんだっけ？」
「とぼけるなっ！真面目に聞け！」

魔王が消えると同時になだれ込んできたのは義妹のフィアナと大柄なベルガの二人だけ。
子供なレイシューは昼寝、無感心なリッツェルは我関与せずだろう。
どうやら微かな魔の気配と俺の部屋から聞こえてしまった女の声で魔王とばれてしまったらしい。

「あーぁ、ドア破壊してどうすんだよ。後でめんどくさいことになるじゃねぇか」
「黙れッ！どうしたんだ、最近のお前はおかしいぞっ！やけに一人になりたがるし、上の空になったり考え込むことが多いし、おまけにものぐさに磨きがかかっちまった」
そんなには不審な行動をとったつもりはないのだが、真面目で堅い彼が言うからには変だったんだろう。
それからたっぷり2時間くらい説教された。
その間俺はずっとだんまり。

ベルガの言うことはもっともで反論することはなかったし、だからといって俺は魔王とのことを話そうとは思わない。

「言え！魔王と何があった！」

「・・・」

俺は話を聞き流しながら外を見ると空が橙色に染まっていた。
彼女は今何やってるんだろうなぁ・・・。
ちなみに彼女が今、厄介事に首を突っ込んでいることは彼にわかるはずもない。

「おいっ！話を・・・」

「・・・ねぇ、フェイル」

と、今まで黙っていたフィアナが口を開いた。
・・・なんだかすごく嫌な予感がする。

「これは私の推測にすぎない。だから聞く。前々からずっと、思っていたことがあるの」

ベルガが傍にいて、怪訝な顔をしていることを承知の上で彼女は話そうとしている。
そしてそれが何なのかも俺はわかっている。

・・・やめてくれよ。
どうする。話す前に止めるのはあまりにも不自然でベルガになにかしらばれてしまうおそれがある。
かといってフィアナに話されてしまえば、そしてその内容をベルガに聞かれてしまっては、駄目だ。
しらばっくれればいいだけなのかもしれないがそんなことをしてし

まえば、今までの不審な俺の言動からフィアナは自身の考えに確信を、ベルガは合点がいき怒り狂うだろう。

何か、何か・・・。

そう考えても時は無情にも待ってはくれない。

「あなたもしかして魔王のことが」

ドオオォォォーーーーン！！……

何の予兆も無しに起こった外からの爆音が部屋中に響いた。

―３― ●魔王お楽しみ中（１）

私こと未緒こと魔王は黒髪をフードで隠すと一人外で突っ立っていました。
何をしているのかと聞かれれば特にこれといって何もしていない。
…だって何もすることが、ない。

「…暇だなぁ～」

勇者様と別れてから城に帰ってきたのかと思えば、実はさっきいた宿から少し離れた場所に出ただけだったのだ。

シャニアさんは結構放任主義なので私に、あれをしろこうしたほうがいいなどという風な意見を出したりはしない。
彼女に対して私が気をつけることはせいぜいご飯の時間と女の子としての行動くらいだ。
それさえ気をつければいつ帰ってもさほど問題はない（夜中に帰ればさすがに怒られるけど）。
どうせ城に帰っても何もすることがないから、その辺でぶらぶらしてようかと思っていたのだが、外は外で黒髪のせいで正体を隠さなければならないため、魔王にとっては暇の巣窟だった。

「勇者様、今何してるのかなぁ…」

ちなみに今、彼はベルガによる説教中だということはわかるはずもない。
このとき、魔王は茶屋に入りだんごらしきもの食べていた。

「へへ、この世界のお金はシャニアさんから貰ったもんねー♪ん～。

おいしい、これ！」

お小遣い貰ってはしゃいで喜ぶところその姿は子供っぽいということを本人は知らない。

「お、おい、やめようぜ」

「何言ってんだ兄貴。あいつらを狙えばたんまり金が手に入るぜ！」

…？なんだろう？

声は茶屋の裏から聞こえた。どうやら位置的に魔王にしか聞こえなかったらしくお店の人もお客さんも気づいてはいないみたい。

とにかく行ってみることにした。

もちろん右手にお茶、左手にだんごもどきを忘れない。

「だ、大丈夫…だよな？失敗しないよな？」

「大丈夫、大丈夫。失敗なんかしねえさ。兄貴が頑張ってくれたらな。駄目でも弟の俺が何とかするからさぁ」

「お、…おぅ！やるぞ俺」

「さすが兄貴！じゃあこっそり行くぞ」

…こっそり行っても私と同じくらいの背丈のあなたならばれないかもしれないけど、それよりもプラス０．５メートルくらい（ようは私の半分くらい）でかすぎる兄貴さんは確実にばれちゃうよ！？

「うぁっ！」

あ、こけた！どこに行くか知らないけど絶対にばれるよっ！

あなた兄貴なんだからリーダーシップとらなきゃ。

どうしよう、注意したほうがいいのかなぁ、もぐもぐごくり。

それにしても兄貴さんは単純だなー。
これから悪いことしようとしているんだろうけど、弟に褒められたからってなんでもしていいわけじゃないよ？ずーっ。

そして魔王が考えたり、お茶を飲んだりしている間に二人は行ってしまった。
…まぁ、私にできることはないよね。
もし止めに行ったりして、激昂して襲い掛かってきたりうっかり髪の毛見られたりしたら大変だもん。
…この世界にきて初めて人間と話した、あの時みたいに、なっちゃう。

ごめんなさい、今あの人たちに狙われているどこかの誰かさん！
悪いようにはならないように私は願ってますから！

結果、悪いようになったうえに彼女までもが巻き込まれてしまうのだが。

―３― ●魔王お楽しみ中（１）（後書き）

文章力なくてすみません…

●魔王様はみた！（2）（前書き）

かなり短くなってしまいました…。

●魔王様はみた！（2）

だんごを食べ終え、あんまりにも美味しかったのでとりあえず城に持ち帰って食べる分も買ったあと、魔王はまた宛もなくぶらぶらと歩きながら今日のことを思い出す。

勇者様ぁ～…。…会いたいよぅ。

…はっ！ダメダメっ！またネガティブモードになっちゃった！いけない、いけない…。

そ、それにしても…、私、ゆ、勇者様に抱き、抱きしめられた上に、頭なでなで、されたんだよね…！

…きゃ～っ！と今更ながらに恥ずかしさが舞い戻ってきて、一人悶えてしまう。

さて、フードマントを着た奇妙な不審人物が道端で不審な行動をとっている姿を想像して欲しい。

魔王は周囲に道を避けられていることに気づかないまま、宛もなくさらに歩き続ける魔王。

…あれ？あそこにいるのってさっきいた兄貴さんと弟さん…だよね？それにあそこって確か…。

そこは魔王が知っている場所だった。何せそこは数時間前まで自分がいた勇者たちの宿の目の前だったのだから。

魔王はこっそりとばれぬように、そして周囲からさらに不審な目で見られていることにも未だ気づかぬまま二人の近くの草むらへと隠れこんだ。

こんなこと、地球だとやったことなかったけど意外とドキドキするもんなんだね…

「やったな、兄貴！案外簡単と出来るもんなんだな。あいつらの部屋の前を通るときなんてひやひやしたもんだけど、あのでかぶつ、馬鹿みたいに声でかいもんだから俺たちが音を出しても全然楽勝だったな。前に狙った一行は気配だけで察知したってのによ」
「し、静かにしてくれ、クリュウ！ばれちまうし、起きちまうよ！」
「臆病者だなぁ、兄貴。あと名前で呼ぶな。自分の首をしめてるようなもんじゃねえか。…まぁ俺らを知ってるやつなんかどこにもいないだろうけど。なあに、大丈夫さ。あいつら俺たちが戻るときもリーダーさんを怒鳴ってたじゃねえか。多分まだ気づいてねえぜあの馬鹿野郎共。勇者ご一行のくせに自分たちの大事な仲間がさらわれたというのに気づきもしないなんてな」
「…追っかけてこないか心配だ。そ、それにしても、子供、かわいいな。見てるだけで和む…」
「おいおい、一応人質なんだから変な情うつすなよっ」

……はっ！
こ、これってゆ、誘拐？の決定的瞬間？なの？
しかも捕まったのって勇者様の仲間だよねこれ流れ的にきっと。というかさっき言ってたしね。
え？あれ？これ、勇者様に伝えるべき？
いや、あれ、でも私、一応敵だしっ。あ、一応じゃなく敵だった。
じゃ、取り押さえる？…って、無理！１００パー無理っ！こんな警察とかレスキュー隊とかみたいなのの真似できないし、怖すぎる！
ど、どうしよう！

●魔王様はみた！（2）（後書き）

ちなみにサブタイトルは「家政婦はみた！」とかけてますよ

●整理整頓（3）（前書き）

今回は会話なしです。

●整理整頓（3）

え～っと、へ、え～……ぁ…え……。
…し、深呼吸～……、深、呼吸～……、よ、よし！
じょ、情報整理タイム！さいわいあの人たちはのんびり雑談中ですぐに動く感じはしないし！
落ち着いて色々とわかったことを考えよう。

そのいち、彼らは誘拐犯で狙いは勇者様たち。

…まさか私が目撃者になるとは思わなかった。私一般ピープルだし。魔王だけど。
で、彼らが目をつけたのは勇者様の仲間のあの子。…あのれ、れい、…れいなんとか君、いや、ちゃん？とにかくあの幼稚園生みたいな可愛い子。見た目的には…男の子、なのかな？
麻袋みたいなのに顔だけだして包まれているみたいだけど、見た感じただ眠っているだけみたい。ちょっと安心。

そのに、兄貴さんと弟、クリュウ君だったかな？は外見や性格が二人とも全然違う。

…というか兄貴さん、ばれなかったんだ。運がいいとしか言えない。兄貴さんは背が2メートル以上あって顔がちょっと？怖いんだけど、でも心配性で子供好きな人みたい。あの子を大事そうに抱えてるしね。

それに比べてクリュウ君は顔が幼く私と同じくらいの背丈のくせに言ってることも喋るときの顔も悪人そのもの。口も悪く勇者様たちを馬鹿にした言い方に私はカッチーンときた。

仲間の人たちは話したことがないからわかんないけど少なくとも勇者様は、勇者様は確実にあなたよりも強くて優しくてかっこよくて王子様みたいなんだからね！めんどくさがりだけどかっこいいもん！まったく！

…それにしても、なんだろう？二人のうちのどっちかから多少の魔力を感じる。

多分は私は魔王だからそのことがわかるんだろうけど、どっちかから魔力ってことは片方は魔の者で片方は人間なんだよね。

もっと近づけばどっちが何なのかはわかるんだろうけど、どういうこと？魔の者と人間の兄弟なんて見たことも聞いたこともないよ？

それに魔王の私が近くにいながら魔の者が気づかないなんて…。

シャニアさんがよほど魔力の弱い者か少ない者でなければ魔王の存在には絶対に気づく、って言ってたから、多分彼らはそのタイプなんだろうけどこのファグアラネルに弱い、または少ない魔力を持った人なんて滅多にいない。ゼロに近いくらいだ。

魔の物の数はだんだん減ってきているけど、それでも一匹一匹が勇者様が苦戦するくらいとても強いのだ。

…？？弱く少ない魔力の魔の者はいないけど現に片方の魔力はそうで…？…よくわからない。

そのさん、勇者様は仲間の人に怒られてしまっている。

うぅ…、ごめんなさい…。
そりゃそうだよね。魔王が近くにいるのに倒さなかったんだもん。
私が謝る必要はないのかもしれないけど好きな人は今、自分がきっかけで怒られているのだ。平気でいられない。

ちなみに勇者様がなぜか私を倒さないのはいつものことだし考えても答えはでないので気にしないようにしている。
遊び相手だとか思われていたりしたら、私を倒すなんて簡単だから今はしないとか思われていたりしたら、すごくいやだ。
…だから知らなくてもいいの。

＊＊＊＊＊＊

…よし、なんとか整理できたし落ち着いてきた。
それにしても兄貴さんたち、誘拐が成功したからってのんびりしすぎじゃないかな？
私が考えている間、ずっと二人ともゆる～く喋っているけど。
でもさすがにそろそろ移動しちゃうよね。

…どうしよう、か。
さっきも思ったけど私が助けに行くなんて絶対に無理！二人とも強

いかもしれないし、なにより怖い！
それに私はたとえ片方が魔の者でも、できるだけ自分の髪を見せたくはない。…すごく、怖いから。

…でもこのまま放っておくなんて出来ないし、ダメ。
身代金目的とはいってもあの子が無事で済むとは限らない。万が一のこともある。

勇者様に伝えようと考え、入り口前にあの兄弟がいるので本人の所にテレポートしようと思ったけど、　私には出来なかった。
あの人が叱られているということはきっと、彼がいる。
彼は以前私が現れた途端に斬りかかってきたことがあった。
それに勇者様が怒られるそもそもの発端は私。今あったりしたら確実にややこしいことになる。

そして周りの人に言ってもきっと助けることはできないし、あの二人も周囲の声でやめるような生半可な覚悟で人攫いなどしないだろう。臆病な兄貴さんは別として。

・・・なんとかしなきゃ。あの子を救えるのは私だけなのだから。
本当は、わかってる。今この時私がするべき最善のことくらい。

私は魔王だけど、でもそれでもやっぱり人間だから。あの子を助けなきゃ私は本物の犯罪者になってしまうし絶対に後悔でずっと苦しむことになる。…いや、そもそも人でない行為だそれは。
…でも怖いから仕方ないじゃない！うぅ…。

それともう一つは確かに私は人間だけど、魔王でもあるからね。
あの魔の者を私の思うとおりにさせなくちゃ！

□その時その頃（４）

俺たち兄弟は血が繋がっているが兄貴はいわゆる＜まざりもの＞だ。
＜まざりもの＞は人間と魔の者の間に産まれてしまった者のことで
その数はかなり少ないし希で珍しく、人間にも魔の者にも嫌われて
いる。
だって人間と魔の者が結ばれるなんてありえないし、どちらの血も
混ざり合っているやつなんて好かれるほうがおかしい。

人間は差別をする。
店は客が金を持たないと知るとすぐにそいつの存在を視界から消去
し、貴族は相手の身分が低いと知ると急に見下し始める。
それと同様に相手が魔の者と分かるとその場で敵とみなし、恐怖で
倒そうとするか逃げ出すかの始末で恋愛なんてするどころかそんな
感情さえ起きないだろう。

対して魔の者は自身を高く評価する。
人間や動物など口ほどにもなく、食えるもんは喰うし、気に入らな
いやつはすぐ襲い、気に入ったやつはどちらにしても飽きると逃が
さずに襲う。中には人の形をした魔だっているんだ。
俺は出くわしたことがないからこれは母ちゃんの母ちゃん、つまり
婆ちゃんから聞いた話なんだけどな。
だから人間なんて同等なんて思ってもいないから当然恋愛感情も沸
き起こらない。

まぁこんな感じで人間と魔の者で恋愛なんかする已然の問題なんだ。

だが、父ちゃんと母ちゃんは違う。
二人はちゃんと恋をして、駆け落ち結婚して、俺たちを産んで、数日後に二人仲良く逝っちまった。

ついさっき人と魔の例を出したが、あれは九割の話だ。
残りの一割はもちろん、何者にも誠実で恐れない人間、強いのに人を襲ったり人に嫌われることを恐れる魔の者。
いや、もしかしたら一割以下かもしれない。
そして、その中に含まれる父ちゃんと母ちゃんの二人が出会えたのは奇跡に近いこと。

この一割にはいるものはとても良いことかもしれないがそれは逆に危ういことなんだ。
恐れることがなく強く勇敢でも所詮は人間。魔の者に負けてしまうものが多い。
強くても人を襲わない魔の者は人間達に簡単にやられてしまう。

何度も言うが、だからこそ二人が出会ったのは本当の本当に凄いことなんだ。

＊＊＊＊＊

「…クリュウ、どうした？」
「…、昔のこと、考えてた」
兄貴もその一割の中の人間だ。いや半人間かな？兄貴の血には１／４だけ魔力がある。父ちゃんも「まざりもの」だったから。魔力はかなり弱いかもしれないがそれでも使えば効果は抜群だ。
…兄貴は気絶しちまうけど。
兄貴がもっと好戦的な性格だったらなぁ。
そんなことになったら人間である弟の自分は殺されてしまっているのかもしれないがそう思わずにはいられない。
ちなみに俺は人間の母ちゃんと父ちゃんの人間としての血を受け継いだから魔力無しのれっきとした人間だ。
「なあクリュウ、なんで父ちゃんは人間の母ちゃんを好きになったんだろうな？母ちゃんも…」
「わからない、知らない。…何度も言ったはずだ」
「俺たちを嫌わないやつ、いるのか…？」
「だからわからないって。…でも、いるんじゃねえの？かなり少ない極小のちょっとの小さくありえない確率で」
「…それは、つまり、いないってことか？」
めずらしく兄貴はくいついてくる。…子どもを前に何か思うことがあったのか？
「だから、いるんじゃねえの？って。しつこいな。まあいてもいなくても俺たちは変わらねえよ。魔の者にも人間にも好かれない兄貴に弟の俺は味方する。…これだけは絶対に変わらない」
「あぁ…。だからこそ俺はお前だけを信用する。これで、おあいこ」

そうさ、たとえ他に味方が出来たとしても、これだけは

「ち、ちちちちょっと、待ったぁー！そこの、そこのふたたたふたふたぎぎゅぁっ！」

…人の思考を邪魔しやがって、何だこの騒がしい姿を隠した正体不明のやからは。
顔はマントを被っていてよく見えないので人間か魔の者かはわからないが声からして女だろう。
いきなり出てきたくせに声は震えているし、あんなに短い言葉なのに勝手に舌を噛んで一人悶絶してやがる。わけわからん。

…まあ多分敵だなこいつは、馬鹿野郎だけど。
痛みが少しひいたらしい馬鹿女の表情はみえないけど絶対涙目だな、ありゃぁ。

「うぅ、そ、そこのお二人さん。き、聞きました、よ。あなたたちのしてることっ…」
「そんな痛そうに話されると、なんか俺らが悪もんみたいじゃん。あんたにはまだ何にもしてねえぞ」
「えっ…。ぅあぅ…」

とりあえずこいつは撒くとするか。
つーか、これだけで怯えるとかおかしいだろ。どんだけびびりなんだよ。
あんた俺らを止めに来たんじゃないのか？

「そ、それはそうなんだけど…。でも！私はもうだいじょ」
「あぁ、喋るな喋るな。これ以上噛むと舌噛み切って死ぬぞ。これは聞いた話なんだが舌を噛み切っちまうと切れた舌は喉に戻ろうとしてさらにその時の血だらけの舌はま」
「ふむうーーっ！？」

これしきの恐怖で両手で耳を塞ぎ、顔は見えにくかったがはっきりと目を瞑り歯を食い縛りはじめた大馬鹿女。
女なのにみっともないしまるであのラギデキザルみたいだ。
ラギデキザルって臆病な性格で、薄赤い甲羅で覆われていて穏やかな感じなのに、食用にされてしまう上にかなり美味しいという生き物。
さて、今のうちに逃げるとするか。

「うわっ、く、クリュウ、ま、待ってくれ！」

俺はでかい兄貴と比べて小さく小柄だからかなり足が速いほうで、一人で逃げるのなら容易いことだった。
だが、突然走りだした俺に大声をあげながら、それでも人質を大切そうに持ち、大きな音を立てながら追いかけてくる愚か者の兄貴。
これじゃあ逃げてもすぐばれちまうじゃないか！

…まあ、おっちょこちょいで臆病で怖がりで馬鹿で単純なラギデキザル女にそんな心配はなしか。
顔や体つきはよく判らなかったけど足の速さは俺よりも遅いとみた。
兄貴という荷物があるがそれでも逃げ切れるはずだった……なのに。

「ま、待って！その子、知ってる子なの！いや、知らない子ならど

うでもいいわけじゃないけど…。お、お願い、返して！」
「…何で目の前にいんだよ馬鹿ザル」

□その時その頃（４）（後書き）

ちなみに勇者様、いまだに叱られ中

●不審（5）（前書き）

クリュウ君初対面に対して失礼すぎです（笑）

●不審（5）

「な、さ、さる！？」

見ザル言わザル聞かザル状態になった私が我に返ったのはすぐのこと。
慌ててテレポートで先回りするけど先にいたクリュウ君はびっくり顔。無理もないか。
でもなんで猿！？多分この世界に猿はいない…と思う。しかも馬鹿付きだし！

…納得はいかないけど、まあ一先ず置いといて一つ確信したこと。
クリュウ君は近くに、兄貴さんはちょっと離れたところから走ってきてるけどクリュウ君からは一切の魔力を感じない。
つまり魔は兄貴さんだ！

どうしようさっきはちょっと離れてたからばれずに済んだけど、さすがにこの距離じゃ兄貴さんにばれちゃうかな？
…兄貴さん、いい人みたいだし、下手に刺激しなければ大丈夫か。

「あの、とにかく返してくれませんか？」

クリュウ君の質問はあえてスルーさせていただくとする。
向こうも返答を期待していないみたいだった。

「馬鹿かお前は。って馬鹿ザル女だったな。俺はお前みたいな馬鹿じゃないから易々と人質を渡すわけねぇだろ。言ってる意味がわかるかー？」

むっかー！かなり馬鹿にされてる！

「わかってますっ！それでも渡してほしいんだから言ってるんじゃない！は、早くしないと痛い目見るよ！？」

半分脅しをしてみる。無効の反応によっては本当にするけど手加減するし、人間相手に軽い暴言くらいなら私は魔力は使わない。

「お前に何が出来んだこのずん胴のまな板。体を上手く隠してるけどお前絶対あるべきところに肉ついてねえだろ」

前言撤回および制裁決定。

というか本人目の前にして言うやつがあるか！

口が悪すぎるにも程がある！確かにシャニアさんとは違って私のはスタイル抜群とは言わないけど、でも平均的にはある。つもり…。

よ、よくも人が気にしていることを！

「…よ、よくも言ったわね！私をず、ず、」

「ずん胴のまな板短足」

「つけたさないでよ！」

これ以上私を怒らせないでよー！魔力が抑えきれなくなってるんだから！

人間に魔力を、それも魔王の魔力をぶつけるのだ。人にあてたことはないけど今私から流れ出てる魔力の量からいって痛いじゃ絶対に済まない。

「……はっ、はっ、ぅ……や、やっと、……っ……、……？……、……え……？…ぁっ……ま、まさか……！」

兄貴さんようやくご到着。そしてかなりの時間をかけてやっと私に気づいたご様子。
っていうか私ってそんなに魔力強いのかな？何ていうか…うん。すごく驚いてる。
息も止まっちゃってるんじゃない！？ってくらい。というか怯えてすらいる。
…そんなに、私が怖いのかな…

「兄貴…？どうした？」
「…く、くくくくくりりクリュウ！こ、こいつ魔の」
「…ぅ、ん～……？」

あ、何とか君が起きた。それにしても美少年の顔は寝顔もカッコいいなぁ。
子どもだから可愛さもプラスしてる。私にはこんなのなかったもん。
この子の寝起き顔はやばいくらい可愛い！
…でも起きる時間じゃないのにうるさく起こされてしまったためかちょこっと不機嫌顔だった。

「…あ、魔王だ」

しばらくぽや～、っとしてたけど焦点があってくると、勇者様たちの所によく着て行く服を見て私が誰かわかったみたい。
ぼんやりしてるところが可愛くて、やっほ～、と手を振ってあげたいとこだけど。
…うわぁ、やっちゃった…。

「…ま、おう、だ？」

うぅ、ばれちゃった…。
……あれ？そういえばなんで正体隠してたんだっけ？
よくよく考えてみれば私は今顔も髪も体も隠しているんだからばれにくいし、たとえ魔王とばれたとしても周囲に何か言われたり何かされたりする前に、私は何とか君を連れてテレポートすればいいだけの話なんじゃ…？

うかつっ！ししまったぁー…！
うぅ…馬鹿って言われても否定できないよ…。

でもでも、今は時間がない！そうとわかればすぐに動くべし！
…と思ってたけど、兄貴さんがなんか変。ずっと震えて小声でなんか喋ってるから…何か怖い。

「えっと、君、何て名前だっけ？」
「？れいしゅー」

さすがは幼児。警戒はしてるけど素直だから正直に答えてくれる。
可愛いなぁ…。

「じゃあレイシュー君。危ないからこっちに」
「う…うわあああぁぁぁぁぁ！！」

ドオォォォーーーン！！……

ほうけていたのはほんの数瞬だけ。原因はわからないけど何が起きたのかはすぐにわかった。
魔力の衝撃。

「危ないっ！！」

私は急いで歩いて来てたレイシュー君を引き寄せ魔力のバリアをはる。

ついでに兄弟たち、民家にも。

たぶん人としての心が反射的にそれらを守ろうとして、結果魔王としての大量すぎる魔力が素早くそれらを守れたんだと思う。

残念ながらお野菜たちは半分焼けちゃったけど、私はみんなを守れたからすごく嬉しかった。ごめんね、数々の美味しい野菜達。

まったく、兄貴さんはっ！何てことするの！私がいなかったら大変なことに…

ひゅう…

バリアを解いたために感じる新鮮な風。ちょっと強いけど涼しい風は

パサッ

「あ…」

風は私が隠していたものをさらった。

●不審（5）（後書き）

事情により春まで更新がかなり遅くなります。
それでも一次投稿停止をやめないのは私が書きたいからで…（汗）
それでも読んでくださると嬉しいです。

○守る（6）（前書き）

月に一回あるかないかの更新になりそうです

○守る（6）

…どういう状況なんだ？
爆発音がしたから説教を中断して遅ればせながら駆けつけてみたはいいが…。

いち、辺りは焼け野原のようだが民家はなぜか無事

つまりは家だけを綺麗に避けて焼けていて、地面からは煙がいくつかたっている。
人の手にしろ、魔力にしろ、難しいことなのはわかった。

に、その焼け野原上に立っている四人

そのうち二人が一般人だとして、無事なことに安心したが問題は他二人。
…なんで魔王とレイシューが一緒にいるんだ？
レイシューは俺が最後に見たときは旅の疲れと昼寝時間でフィアナの部屋でぐっすりと眠っていたはずだ。
一方、砦に帰ったと思っていた魔王は俺の部屋で別れて以来、つまり数時間ぶりの再会というわけなのだが、部屋で昼寝の仲間と城に帰ったはずの魔王。
…だめだ。二人が出くわす接点が見つからない。と、いうか何気に魔王に抱きかかえられているレイシューがうらやましすぎる。

さん、ではなぜこの四人は対峙しているのだろうか

人間対魔の者、3対1。
…俺から見た客観的な考えだが、誰がどう見てもこれは魔王の仕業にみえてしまう。…不本意だが。

「お、おい…、あの、髪は…」

ついでに野次馬も出てきた。
まぁ近くで爆発が起きたのに平然としていられるほうがおかしいか。
こいつも言ったが、そう、何を隠そう魔王の髪はあらわになっていたのだ。

「…うぁ…うぁあ、ぁ…」

一般人である二人のうちの片方が言葉にならない声を出しながら何かに怯えているが、魔王が人に恐怖を与えるようなやつじゃないことを俺は百も承知。
魔王は魔であるのに絶対に人を襲ったりしない、優しくて人よりも心が綺麗なんだ。もちろん言葉にしたりしないが。
心に留めておくならともかく、口にしてはかなりこっぱずかしい。

「っ！ゅ、ゆうしゃ、さ…！」

俺に気づきさらに必死に両手で髪を隠そうとする魔王。
だが、村人も一般人二人も、そして俺達一行もその黒髪をすでに見てしまったので、それは今更な行動だった。
…なぜ隠すんだ。確かに人として黒髪は異様なものだが、お前の黒髪は綺麗なんだから隠す必要なんか…。

「このやろうっ！」

と、急に村人の一人が魔王に向かって石を投げ始めた。
彼を筆頭に続々と石を投げていく村人たち。

「あんたなんてっ！」

その中には俺たちの今の宿のおやっさんや、さっき俺たちが一休みした茶屋のおばさんもいた。

「どうしてくれんだいっ！あんたがあたしの店に入ったおかげで店を続けられなくなっちまったじゃないかっ！」
「娘が襲われたのもどうせお前の差し金だろう」
「なんで…、…なんでこんなのが村にいるんだ！」

老若男女全ての村人が魔王に石や罵声を浴びせていく。
それにしても、魔王相手に無謀な。いや、魔の者というだけで魔王ということには気づいてはいないのかもしれないな。
とうの魔王はレイシューに再び防御の魔力を使った後、自分にはかけずに顔を伏せたまま微動だにしない。
…あえて、防御壁をしていないんだ。

…守りたい。
めんどいとか勇者とか敵とか。
もうそんなのは頭の片隅だ。

何もせずただ見てるだけでなく、俺は彼女を助けたいと思い、実際、それを実行しようとした
…のだが。

「お、おい、勇者様だぞ！」
「勇者様なら私たちを救ってくださる！」

なんで余計なことを言うんだよ！
その言葉のせいで俺の動きは自動的に止まっちまったじゃねえか！
これが本能なのか！？

…俺たちの立場が改めて思い知らされた。

●黒の陰（7）

動けなかった。
動けるはずだと、何とも感じないと、あるいは誰かが助けてくれると。自分をどこか甘く、考えていたのかもしれない。
罵倒が、石が、侮蔑が、私をつんざく。
目の前のこの子にはそれを浴びせてはいけないからバリアをはった。
でも私はいけない。だって私が悪いから。

私は魔王。魔王は魔の者を統べる食物連鎖の頂点者。

村人が言うことは、多分私の部下にあたる魔の者たちがこの村の娘たちを襲ったのだろう。
もちろん私はそんなこと命じていない。…命じるわけがない。
でも実際にそれは起こってしまっている。つまりは私の管理不足。

…私が魔王らしくないから
私が人間だから
私が…悪に染まりきろうとしないから

大事なことは放任のシャニアさんにまかせっきりでいつまでも勇者から『玲心の珠』を盗りだそうとしないから…
だから、多くの魔の者は城でも外でも私を嫌う。

…シャニアさんはこうなるのをわかってて、あえて私を放任してたのかな？
他人任せな魔王様にわからせるために…

＜…あぁ、そろそろかな？＞
「え？」

今の、誰…？

「お、おい、勇者様だぞ！」
「勇者様なら私たちを救ってくださる！」

…勇者、様…
倒さなくちゃいけない
彼は敵だから。
私から『紅心の珠』を盗ろうとしている。
これ以上魔の者の好きにさせてはいけないから
彼らを護るためにも…

…でも、待って
もうちょっとだけ私に考えさせてっ
今はまだ、貴方と戦いたくない…
逃げるわけじゃない
ただ今は…

＜…とりあえず、今この場を何とかしたらどうなの？＞

…また。でも確かにその通り。

私は早く離れて一人で考えたい。
…魔の者のみんなに認められて、彼と戦わない方法を。
私は、離れてたたずむ勇者様の勇姿を心に焼き付けた。
だってあなたは私のこの世界で生きるための希望の存在だから。

「…今回は負けを認めます、勇者。さらばです！」

私はかっこよく逃げさるつもり、…だったけど、
この時忘れていたことがあった。

「えっ、えっ！？」
「ぁ…」

それは足元にいた子どもの存在。
しっかりと私の魔力に巻き込まれてました。

「ま、待ちやがれてめぇっ！」
「う、…く、クリュウッ！」

そして目の前の二人。
というかなんで追ってくるの！？
そんなにまで『勇者の仲間＋子ども＝絶好の人質』が必要なの！？
…はい、もちろんその二人も道連れになりました。
なんだか余計なモノを巻き込みつつ、私はテレポートしてしまった

のです。

＊＊＊＊＊＊

ちなみにその後、逃げた魔王へ悪態や勇者への賛美、今後のことなどで躍起になる村人たちの中で

「…負けを認める、って…。勇者はまだなんもしていないんだが……」

そう思う若者が一人いたことを誰も知らない。

◇日記（8）

＜令蝶の月　　＊＊日＞

ついに亡くなってしまった。私の敬愛していた…シウリィ様が。
名前で呼ぶことを願っていたあの方に私は最後まで目の前で呼ぶことはなかった。
彼女が魔王では無くなった今だからこそ、名前で呼びたい。

周りの奴らはシウリィ様が亡くなったことで新たな魔王様を捜索する準備を始めている。
彼らにとって必要なのは出来たばかりの新米魔王という弱い存在なのであって強い威厳や魔力の量などは必要としていない。無知なだけ自分達の良い手駒になるためらしい。
だからこそ誰もがシウリィ様の存在を忘れようと……いや、多分もう忘れてしまっているだろう。

あなたが醸し出した美しさを
あなたが発した無邪気な声を
あなたがだした恐ろしいほどの威圧を
あなたからにじみでた優しさを
私は絶対に忘れない。シウリィ様、貴女が私に下さったことを…

＜寒帯の月　　＊＊日＞

あれから一月がたち、そろそろ外は暖かくなる頃だが城の外は魔の者の巣窟のため、空は曇りに曇り、いつだって寒い。寒さに寒さが募る。

…未だにシウリィ様の陰を追ってしまう。
忘れはしない。だが、いつまでも考えていてはしょうがない。さらにそれが仕事に支障が出るとなれば。
そろそろ『紅心の珠』を宿した新魔王が見つかるというのにこんなことではいけない。シウリィ様が亡くなってしまったために、次の魔王が今度こそ『玲心の珠』を奪ってくれるはずだ。

次は魔の赤子か、次は微生物の老いぼれか。はたまたただの獣かもしれない。
『紅心の珠』は宿主を失うと次の者にうつるので、誰もが魔王になれる素質があるのではない。珠に気に入られた者だけが魔王になれる。それは人間側の『玲心の珠』でも同じこと。
シウリィ様は人型の魔の者、現勇者は獣であった。もっとも、もう生命を終えるみたいだが。
意外なことにこの勇者、話せはしないが言葉は分かるというので人狼の血が流れているのかもしれない。
二人…いや、一人と一匹？もしくは二匹…まあともかく彼、彼女らはお互いに宿敵などではなく、最愛の敵といった感じだったが、ついに最後まで決着はつかなかった…。

シウリィ様は死後の世界でどう思っているだろうか？勇者はこの結果に喜んでいるのだろうか？
これは本人でなければまったくわからないが、私にはなんとなく想像はつく。

次の魔王様はどんな方だろう？次の相手はどんな人間だろう？
双方ともシウリィ様達に似ることを願う反面、やりにくい事になりそうなので似てない事も願う心持ちだ。

＜初秀の月　　＊日＞

新魔王様の居所が分かった。なんでも、このファグアラネルとは別の次元にいるというのだ。
こんなことは歴代初で、呼び寄せるなど初めての試み。
どのような姿で現れるのか分からないものほど怖いものはない。もしも屈強な異形な者やドラゴンなんかが現れたら、私にどうしろというのだ。
私には骨のいる毎日になりそうだ…。

あぁ書き忘れていたのでここに報告する。
私はまたしても魔王様の世話係に任命されてしまったのだ。

＜初秀の月　　＊＊日＞

…なんだったんだ今日は、わけがわからない。
あれほど見た目からしてもお人よしで無防備で注意力が皆無でどじでおばかで弱いのに、魔王なんてできるのだろうか。

ましてや『人間』。
そう、召喚された新魔王は人間の少女だったのだ。
人間の上に子ども。なぜ『紅心の珠』はこれを選んだんだろう？
今まで魔王は人間以外、勇者は魔の者以外がなってきたのに。

この予想外な結果に魔の者達の中から半分以上が魔王利用計画から手をひいた。
魔王とはいえ人間の下につく。人間なんぞに頭を下げなければならない。私は別に気にしないが、彼らにはプライドが許さないのだという。
人間だから殺せばいいのだが、彼女の中に『紅心の珠』がある以上手も足も出ない。
すでに彼女は魔王。魔王殺しは大罪、万死に値する。

そんなこんなな新魔王だが、……とにかく甘すぎる。
別に食べたわけではない。そんなことしたら私はすでにいない。
彼女は彼らが待ち望んでいたとおりの、無知で、お人よしで、純粋な人間だったのだ。
急な要望や突飛な行動をするシウリィ様の世話にもてこずったが、これからはもっと大変なことになりそうだ…。

＜暑織の月　　＊日＞

今日も魔王様は勇者の元へ向かう。そのような方なのだろうか。
魔王様が初めて勇者に対面した日に私は尋ねてみたが顔を赤くしたまま「たいしたことはないから！」「き、聞かないで…」の一点張りで何も教えてはくれなかった。

なぜ？そうまで言われたら気になってしまう

…まさか。いやそんなはずはないか。
だってシウリィ様は、仲の良かった私にさえそんなこと一言も言わなかった。つまり魔王は恋はしないということなのではないのだろうか？
『珠』争奪の発端である”あの事件”が起こってからは子を産んだ魔王はいないことだし。
むしろ私にはシウリィ様が想うお方が想像すら出来ない。

まあともかく、断片的にだが勇者のことがわかった。
男、金髪、ものぐさ、…これだけだが。
それにしてもいつ『玲心の珠』が手に入るんだろうか？
いつまでも遊んでいてはどうにもならないのに。
どうせ後で後悔するのは彼女自身なのだから、とりあえず今は放っておこう。
そしたらいつかはシウリィ様そっくりの支配が出来上がっていることだろうから…。

●疑問（9）

…さて、どうしようか？

城に戻ろうと思っていたんだけど、予想外の出来事に急遽転移先を変更したのはいいんだけど…。

――…ここ、どこ？

薄暗い中、私とレイシュー君は古い神社みたいな所の敷居に足をぶらつかせている。…長い沈黙。

ちなみに暗いから私の魔力でライト代わりにしてるから辺りがそこそこ見える。ほんと便利。

よく明かり付けてると獣が寄ってくるっていうけど、これは魔力だから獣は来ないし、魔の者も『あれは人間じゃない』ってわかってくれるから少し安全。

で、レイシュー君だけど勇者様達のところに送ってあげたほうがいいんだろうけど…、…今はできれば行きたくない。

あの謎の声について考えたいし、しかも逃げ去ったはずの魔王が、仲間を返しに来ました、って…。

…カッコ悪いっ！

とりあえずここで一応”捕虜”になってます。

でもキリュウ君と兄貴さんは周辺の探索に出たため、実質逃げられる状態なんだけど。

あ、二人にも魔力のライトを分けてあげたよ。兄貴さん、魔の者なのにそんなには魔力使えないんだって。本当に珍しい。…じゃああの爆発はいったい何だったんだろう。あんな強いの…。

…なんでだろう、二人を憎むことができない。嫌いじゃないからこ

そ、脱走するという気分になれないの。

＜…お人よしなのね＞

…誰なの？どこから聞こえるの？何で私だけ聞こえるの？

＜まぁ、とりあえず、それは置いといて。いくら聞かれても今は答えてあげないから＞

納得がいかないなぁ…。

「どうしたの？」
「いや…。何でもないっす！」
「…？」
＜…不自然＞

…やりにくいなぁ。

「あ、そうだレイシュー君。おだんご食べる？」

持っていたのをすっかり忘れていた。
ぞんざいに扱っちゃったけど多分大丈夫、…だとおもう。少なくと

もあのおいしさを失ってはいないはず！

「…、…食べる！」

子供とはいえ、流石は勇者様の仲間。敵からの産物に多少は悩んだみたい。
…食欲には負けたみたいだけど。

「あ、あと、君、つけないでいいんだよ？れいしゅーでいい」

ポリシーでもあるのかな？なぜか本当に嫌そうな顔してる。良いならいいけど。

＜私も食べたいんだけど…、今は無理だから。仕方ないから黙って眺めてるわ…＞

…今度、他の街に探しに行こう
あの村にはもう売ってないどころか店がないだろうから。

「というか会えるの？」
「？」
＜う～ん…、そろそろなのは確かなんだけど、もうちょっと先、かな？＞

そんな曖昧な。
それにしてもどうやら私が考えていることがすべて伝わるのではなく、彼女に尋ねるように聞いたことだけが伝わるみたいだ。
今はレイシューがいるからさすがに無理だけど、やりずらいし出来ることなら口で話したいなぁ…。

「…ねぇ、魔王」

目をつむれば男の子とも女の子とも聞こえる声でレイシューが私を呼んだ。
淡い金髪やふっくらした頬や口にだんごのカスがべとべとにくっついているのが可愛い。
持っていたハンカチで拭いてあげたあと、一言、

「魔王はなんでいつも魔の者にたすけてもらわないの？そうしたらかんたんに人間をたおせるよ？」

…。
…この場合、正直に答えてもいいのかな？人間の方に知られると…、う～ん……。
…子供だし、いいよねっ。
私は普通の子供はここまで聡くはないし、普通は魔王とまともに話すことすらできないということには気付かなかった。

勇者の仲間というだけあって、子供だけどほんの少しだけ頭がいいのかも…。

「えっと、レイシューは人間でしょ？もしも自分より下の子が虐められてたりしたらどうする？」
「えっとぉ…。とりあえずその子を守る。で、二人の話を聞くかなぁ」
「うん。それが人間の答えだよね」
「魔王は？」
「私は…、わかんないや！」

というか考えたくない、かな。
人間であり、魔の者である私。
私の本心はどっちの答えになっちゃうのかな…。

「例外はいくつかあるけど、助けたり話し合いしたり守ったりする。それが人間だと私は思う」

私の言葉に黙って聞くレイシュー。
彼はやっぱり他の子より頭がよくて優しいいい子だ。

「でも、魔はね…。これも例外はあるけど、手下や仲間が危機に陥っても、人間と真逆のことをしちゃうんだよね。…だから、つまり…」

「…魔の者は魔王を助けないってこと？」
「っ！」

…まさか、そんなに、ズバッと言われるとはさすがに思わなかった。

「で、でも、魔は悪くないの！私がちゃんとしないから！…人間、だから。だから魔の者にとって、当たり前のことを…」
「魔王は人間なの！？」

あ、そっか。人間に魔力は探知できないんだった。

「なぜか半分人間半分魔なの。とにかく私は」
バサバサガサッ！
と、茂みからの怪しい音にびっくりして私たちの会話は中途半端に途切れてしまった。

何？獣？魔の者？このあたりに人はいないと思うけど…。
…でも、かなり怖いけど、何があってもなんとしてもレイシューを守らなきゃ…。

「ほら！いつまでも怖がんじゃねえよ兄貴！情けねえなぁ…」
「だ、だってよぉ～…」
「おいっ！女じゃねえんだから内股で震えんな！」

…完璧に二人を忘れてた。
さっきといい、今といい、二人の存在はなんて忘れやすいんだ。
それともただ私が忘れっぽいだけ？

○訪問（１０）（前書き）

ここいらの話（三章）が終わったら、人物紹介でもしたいです。

○訪問（１０）

「おい、これからどうするよ」
「決まってんだろっ！もうこんな所にいられるかよ！」
「ヤグ牛達は山を越えられるかしら？」
「わ～い。りょっこうっ！りょっこうっ！」
「おそろしや、おそろしや…。わしら老いぼれはこの先どうすれば…」
「別に私一人でも魔王を倒せたわ！」
「まさか今回の魔王が人型だったとは…。顔立ちは好みだったのだがなぁ…。何で魔王なんだ」

それはこっちのセリフだ。
魔王がいなくなった途端に周りの人という人が慌ただしく交差し始めた。
それぞれで何か言いながら引越しの準備をしている。

山奥の小さな村だ。兵もいなければ武器もない。
一応狩り用の弓などはあるみたいだが、それでは小級の魔の者すら倒せない。
というか戦いに未経験な村人では傷でさえ負わせるのも難しい。
それほどの力量差がある。

勇者は宿に戻ろうかとも思ったが、店の主人は客人がすでにいる今夜はともかく明日からは街へ行くらしく準備で忙しそうだった。
勇者は何もすることがないのでとりあえず最後に喋った男に睨みをきかせていると、誰かが後ろから近づいてくる気配がした。

だが殺気は全くしないので危険はない。なんとしてもガンつけを続行するとしよう。

「…一体何が起きたというのですか？」

…なんだ、リッツェルか。一旦ガンつけは終了。

「お前あれだけの騒ぎの中今までどこにいたんだ？」
「私の質問が先です。何があったのですか？」

この俺様陰険研究バカメガネ男め。顔は完璧に女顔だが。
その自分優先な性格はなおせないものなのか？

「…魔王が現れた。それだけだ」

ただそれだけのことなのに村の奴らは山越えなんてめんどくさいことをしようとしてる。それは旅人にとって不幸以外の何ものでもない。

…やはりわからない。
俺は、魔王が好きだ。
確かに彼女は魔だ。人間にとって脅威に属する存在。でも魔であるだけで少なくとも彼女は人間に害のあることは絶対にしない。だからレイシューもきっと無事だろうと俺は信じている。なのになんで他の人間はそれに気づかないんだ。
もしも今の彼らが彼女の性格を知ったなら打ち解けるだろうか？友好的になるだろうか？

…答えはもちろん、否。

これは俺がおかしいのか？俺以外がおかしいのか？
どれだけ考えても答えは出ない。

「そうですか。確かに何か騒がしかったような…。ちなみに私はつい先ほどまで辺りの生態を調査していましたが、良い実験体は見つかりませんでした…。なんて土地なんでしょう」
「…なぁリッツェル」
「何ですか？」
「お前は魔王についてどう思う？」

こいつも魔王を恐れているのか？

「邪魔な未確認生物」
「……は？」

聞き間違いだろうか。言ってる意味がわからん。

「…どういう意味だ？」
「私の大好きなことは研究です」
「嫌になるくらい知ってる」
「だというのにそれを置いて魔王探し…。世界中をアポなしで行けるのは素晴らしいことなのですが、魔王が現れるたびに私は実験中であれ解剖中であれ論文中であれ調査中であれすべてを中断させなければならない…。さらにはさっさとやるべきことをすればいいのにぐずぐずぐずぐず、あんな魔は初めてみました。ですので邪魔な未確認生物」

初めて見たからって、未確認、は使い方が違うのでは？しかも生物って、間違ってるような、間違ってないような…。
というかやるべき事をやったら世界は滅ぶぞ。
でも、そうか。他にも色んな考え方があるのか。

「あっ、そうだ。レイシューは魔王が連れてった」
「……、なぜ？」

「さぁ」

巻き込まれた以外に理由はあるのだろうか？
…魔王は、天然だ。

「そうですか、わかりました」

俺とリッツェルは特に心配はしていない。
俺はともかくこいつは研究しか頭にないので、あいつの安否は考えていないのだろう。…好きにも程があるだろう。
あらかじめ決めていたことなのだが、仲間が不審にいなくなったら数日だけ待ってその後再出発になっている。
もちろんできる限り捜すが、現時点で相手の正体は魔だとわかっているが近くを闇雲に捜しても見つからないかもしれない。だが捜索に時間をかけるわけにもいかないのだ。
……無情になるしかないんだ。ちなみに俺は魔王を信じているからな！

今はベルガとフィアナが森の中を捜している。どこを見ても山だらけな上、夜なので見つかる確率は限りなく低すぎる。魔の者に出くわす可能性だって十分にある。

しょうがねぇ、後で代わって……、めんどいからいいか。

「ところであれは何者でしょうか？」
「…？」

リッツェルに言われてみてみれば松明の灯りだけなので見えずらいのだが行き交う人々の中に一人、違和感のあるやつがいる。頭を分厚い白い布で覆い、薄すぎるくらいの茶色の短い髪が少しだけ見えている。服装はどこかの民族衣装のようで首から膝までが一つの布みたいになっており、まるで遊牧民みたいだ。そいつの服は妙に綺麗で怪しい。だがさらに怪しいのは…

「あれは、人狼……いや、人馬？」

手があきらかに蹄だった。外見的におかしいのはそれだけ。足も普通だし顔も人間。手だけが黒く円型の人間には不便そうな蹄なのだ。…関わりたくねえなぁ。よし、どっかの木の上で寝てこよう。少なくともあいつに見つからないようなところで。

「おいリッ」
「あなたは何をしているのですか？」

お前が何してんだーっ！

「あぁ、すいません～。みればあなたは勇者でしょうか～？」

妙に間延びした少女…ではなく少年。

「いえ、勇者はあちらです」

余・計・な・こ・と・をっ！

「あ、あなたでしたかぁ、すみません～。わたしなにぶん頭が悪いのでぇ、絵で覚えたはずの勇者の顔を忘れてしまったのです～」

「あっそ。…で用件はなんだ？」

こうなりゃあさっさと終わらせよう…。

○まざり（１１）

「今回は僕、ベタが使者として参上しましたのですー。用件はえ～っと一つ、いや二つ、間違えました三つ。……まあいいですぅ」

どんだけ頭悪いんだ。しかも自分で勝手に納得してやがる。

「勇者さん達はこのあとどちらに向かわれますか～？」

長い話になりそうなので正直聞くのめんどくさいからフィアナとベルガの二人と合流し、今は村から少し離れた小さな小屋の中で話すことに。

なぜかって？理由は単純。…村全体が騒がしすぎるからだ。

たくっ、よく夜まで頑張れるよなあ。昼はくたくたに働いたってのに。

…そうさせる理由を思い出して俺は小さくいらついた。

「このあとは確か……山を越えて南東に向かう予定よ」

「あぁ、よかったです～。実はですねぇ、僕はアスフォン国王の命で来ました～。……え、っと、…～…ちょっと、すみません～……

…。……？？？」

肝心のところを忘れててどうする。何しに来たんだよお前。
こいつを出す王も王だ。

「あぁっ！そうだそうだ～！近くに勇者さん方がいることを知った王はぁ、もし東に行くなら是非寄って行ってほしいとのことなのです～」
「…、まあどっちみち寄るかもしれなかったしな。わかった」

ベルガ。それ決めるのは本当は俺の役目。

「ではこれより僕は一行の案内役となります～。ついでに言いますと王は僕たちが到着すると同時にパーティを開く予定ですのでぇ、いろいろと質問攻めになると思うので覚悟してくださいね～」

ハア！？ちょっとまて！！

「それもし俺らが訪問を拒否してたらどうするつもりだったんだ？」
「拒否権はないですよ～？ダメでも無理矢理連れて行くだけです～」

無茶苦茶すぎる！めんどくせえ～……っ！！
どうも俺の見た目は女受けするらしい。あいつらしつこいったらありゃしねえ！
それにあれだろ？勇者として偉いやつらと堅っ苦しい話とかもすんだろ？

……めちゃくちゃ嫌だっ！！そんなのはベルガにでも頼みやがれよ！

「リッツェル！行け！許す！」
「よろしいのですか？では…」
「え、わっ、わあぁ！な、何ですかぁ、この人～？何で目を光らせてるんですか～！？」
「あなたが珍しい人種だからです。馬と人なんてみたことが…」
「え！？僕人の血なんてないですよ～！それに馬じゃないです～！」
「往生際の悪い。そのひづめはなんですか。ぜひ中身を…」
「ち、違いますぅ、違います～！僕は、ラットとヤータです～っ！」

そう言って頭を覆う分厚い布を自分で勢いよく剥ぎ取った。その先に小さな角がまるで鬼みたいにあった。

「…ちっさ！」
「ひどいぃ！…僕はぁ、稀にみる存在らしくてラットとヤータから産まれたただの動物なんです～！それを国王がわざわざ私を人間の姿にして使者にだしただけなんですー！だから、だから、人間じゃありませんー！」
「なんですか、つまらない」

ちっ。興味をなくしたリッツェルはあっさり引き下がった。
涙ながらに布を巻き直すベタ。
声が妙に間延びしてるのも動物特有のやつかもしれない。

「…使者は動物の中からにしよう、と、決まっていたらしいのですがぁ……、王の婚約者のイル様が、まざりの僕を気に入ってくださるのです～。ですから選ばれました～。ただ、…王に何度も姿を変えてもらったんですけど、どれも不完全でぇ…。これでも1番ましなんですよ～！」

涙ながらに蹄を振り回して訴えた。
子供なら喜んで近寄りそうだが、あいにくレイシューは近くにいない。

「でも普通、恋人の好きな動物を送り出すもの？」

フィアナは俺達の出発国であり出身国、トラウジェナに恋人がいるからな。
何か思うところがあるのか。

「…これは僕の勘に過ぎないんですけどぉ…、王は、嫉妬してたのかもで～…。…イル様が動物時の僕に抱き着くだけでリイチ王は睨んでいましたし～…」
「……独占欲が強い方なのね」

俺としては仲良くやれそうなやつだと思うがな。
…ん？ということはまだ未婚？つまりは若いのかな？

「…王に、婚約者だと？ではまさか王とは」
「はいぃ、我がアスフォン国が誇れる少年王です～。ちなみに１７歳ですよぉ？お若いでしょう～」

○まざり（１１）（後書き）

この世界での世間一般で知られてる生き物は動物と人間のほかは魔の者と人狼だけです。
数だけ言えば『魔の者＞人間＞人狼』なのでかなり少ないです。
『ラットとヤータ』は魔王的に言うなら『羊と山羊』です。

○夜（１２）

話し合いがなんとか一段落したところで、ようやく大人しくなった村は眠る頃合い。
飯食ったらみな早々と寝ちまった。
俺は眠る気が全くしないので手頃な木の上にのぼった。
勇者のすることではないのかもしれないが、つい一年以上前までは
こうするのが普通だったのだ。俺にとっては変でもおかしくもない。

あの日、俺がいつものように上で昼寝してたのに目が覚めたら王座の前で横になっていたのにはさすがに驚いた。
気付かなかった自分に。王の御前ということに。急な展開に。王の前だというのに俺を起こさないどこかの馬鹿に。
そして、初めて『紅心の珠』『玲心の珠』の存在を知った。
普通の一般民はそこまで詳しいことは教わらないのだ。

……明日、いやもう今日か。
予定としては明日の早朝からレイシューを捜して、……昼には出発することになった。
それはあまりにも短すぎる時間だと思う。

『…もう少しだけ、待ってくれないかしら』

だがこれはフィアナがねばりにねばった結果だった。

強引なあの遣いは最初、問答無用で「断固、早朝出発」と言って聞かなかったが、最後の最後にようやく折れてくれた。

『ただし昼までですぅ～…。これ以上はさすがに待てません～…。山で野宿は嫌ですしぃ、かといって延ばしのばしにするのも～…』

時間は限られている。フィアナは破る約束などしない。
昼過ぎにはレイシューがいてもいなくても山越えになる。

俺は心配していない。
心配はしていないが、……少しまずいな。
俺や魔王は『紅心の珠』や『玲心の珠』の気配で、お互い近くにいるか遠くにいるかが何と無くだがわかる。
今ここを離れてアスフォン国に行けば、もれなく魔王が着いてくる。
アスフォン国に俺は行ったことはないがあそこは『竜の国』『自由の国』とも呼ばれている。
……何か、すごく嫌な予感がするんだよなぁ…。
魔王があそこにいたら何かめんどいことになりそうな気がする。何だろうか……。

「フェイル」

下を見れば自分と似た金髪に自分と違う琥珀の瞳。
そしてこいつは父親違いの『義理』の妹。

「フィアナ、起きてたのか。さっさと寝ろ。明日は捜すんだろ、体力つけねえと。」
「寝るけど一つ忘れてたの。…昼間の続きよ。あなたがそんなに余裕なのもそれが関係しているのかしら」

……まだ、覚えてたのかよ。

「……どういう意味だ」
「わかってんでしょっ」

怒ったように言う。
…もう、ごまかしはきかなさそうだ。

「ねぇ……魔王じゃなきゃいけないの？」
「……」
「あなたには彼女以外にも、もっと、いろんな…」
「……」

「……だめ、なのね…」
「……他に出会えたら、そうするさ」

でも、いないんだよ。
目をつむってもあいつしか出てこない。
前向きでいようとして会うたびに必死で勝負を挑んでくるが、本当は素直で内気で臆病で馬鹿なあいつ。

「……会えると、いいな…」

それはどちらを思って向ける言葉なんだろうか。

●その頃の魔王さん（13）

「あんた、魔王って本当か？」

尋問もとい質問が始まった。

「…はい」

村人が言っちゃったし、魔力は使っちゃったし、髪は黒いし弁解しても無駄そうだったので正直に話した。

「私からも質問が…」
「なんだ」
「……どうしちゃったんですか、あの人」
「……気に、すんな」

いや、でも私は気になる。
兄貴さんは隠れようと思ったのか木の陰に隠れるけどがたいがでかいから隠れきれてない。
しかもなんか恋する乙女みたいだった。
……正直、きつくて、私が「隠れてませんよ？」って言ったらどうしたと思う？今度はレイシューを顔の前まで抱き上げたんだよ。
だから隠れきれてないから！
そして今度はレイシューが恋する乙女みたいになった……がたい

がいい、レイシューが…。
まあ本人は高いところにいるので喜んでるみたいだけど。

「で、その魔王様がなんでこんなとこにいんだよ。しかも俺達の邪魔までして」

あ、そっか。一般人は私達の『珠』争いを知らないんだっけ。
勇者様じゃないけど、説明めんどくさいなぁ…。

「簡単に言っちゃえば、悪いことはしちゃだめです！私は魔だけど、そこらへんはちゃんとわかってんだから」
「人を襲う魔の者の王が人間に人を襲うなだと？馬鹿かお前は」
「……ぁ、れ？怖く、ないの？私、黒髪だよ？黒目だよ？…魔王だよ？」
「出会いがあれなのに今更恐怖なんてわいてこねえよ。それに気付いてんだろ？……兄貴は魔だ。だから魔関係には少しだが耐久はついてる。…兄貴は力の弱い魔だから、魔王に殺されねえか恐れてるみたいだが」

……嬉しいことなんだけど、なんだか半分が魔として嘗められてる気がする。

「ねえ……半分人間で半分魔の者っているの？私聞いたことない」

なんだかこの子に敬語使うのバカバカしくなってきた。

「聞いたことなくても目の前にいるのが現実だ。……親はとっくの昔に死んじまった。兄貴は、魔の仲間にもなれない。そして特異な見た目のせいで人間の仲間にもなれない。俺は兄貴の弟だからな。兄貴には俺がついてねえと」

人の気も知らないでいつの間にか兄貴さんはレイシューと遊んでる。たぶん友達とかいなかったんだろうな。だから人間のレイシューが普通に接してくれてるのが嬉しいんだ。
レイシューも私と会ったときみたいにあまり怖がったりしてなくて、むしろ楽しそう。
…私、赤の他人だけどなんだか嬉しいな。

「今の兄貴さんは楽しそう……よかったね！」
「…まぁ、それは、そうなんだが……人質と仲良くなってどうするよ」
「……先に行っておくけどレイシューは行かせないよ？なんとしてもとめてみせるから」
「……魔王のあんたに勝てると思っちゃいねえ。さっきの兄貴の暴走で思い知ったさ。下手すりゃ俺も死ぬしな…。でもそしたら俺達はどうすりゃいいんだよ、えっ？人売ってでも稼がねえと迫害される俺達は野垂れ死んじまうんだ。兄貴は働けねえが俺は働こうにもあいつを放って置けねえんだよ」

……でも、やっぱダメ！レイシューは勇者様の仲間なんだから！

でも、兄貴さんたちはお金ないから危ない状況だから、……どうしよう…。

＜……見てられないわね…。簡単な話しじゃない。あなたのお金あげればいいだけよ。どうせありすぎるほど余分に貰ってんでしょ？＞

え…！？な、何で知ってるの？？

確かにシャニアさんからたくさん貰ってて城の中で貯金してるけど、それは増えるばかり。
ないよりはましだからむしろ膨大なお金に浮かれてたけど、私はあげても別に困らない。
でも、何で知ってるの！？

＜ふふん！私にわからないことなんてないわよ。あなたが馬鹿なだけ！＞

ふへぇ～……本当かな。というか明るくけなさないで。

＊＊＊＊＊＊＊

「魔王〜。いま、どこに行こうとしてるの？」

あのあとクリュウ君（兄貴さんは遊んでるからね）に話したけど向こうはだいぶ私の、正確には中にいる人の考えにだいぶ悩まされていたけど、まあ、結果だけでいえば要求をのんでくれた。

『ただし、定期的に送らなかったり、足りなくなった時は迷わず人里で誰かしらさらうからな！』

盗みという危険な道よりは仕送りという安全な道を選ぶのもわかる。

「レイシューを勇者様に帰してあげようと思って。…でもその前に話しておきたかったことがあったから、ちょっと歩こう」

「……キーダとクリュウは？」

「キーダ？……ぁ、ああ、兄貴さんね。見張り兼お見送りということですぐに後ろから追い付いてくるよ」

「…うん、だったらいいよ。歩く」

……たしかに魔王相手なんだから最低でもこれくらいの警戒が必要

なんだろうけど、なんだろうこのむなしさは。
私魔王なのに半分魔の兄貴さんに信頼度で負けたし……。

「……兄貴さん達が来る前に言おうとしてた言葉の続きだけどね。私は魔力を持っているから、兄貴さん達と同じで居場所はないの。だから私は、唯一置いといてくれるあそこにいたいの。…帰る私の、最大の近道のためにも、私は答えなきゃ」
「……帰るって？」
「ぁ、う～んとね……、私は本当は遠くに住んでたの。だから私、ここじゃよそ者でしょ？早く帰らなきゃ……」
「魔王はそこで待たせてる人がいるの？」
「ぇっ……」
「だったら早く帰ってあげなきゃいけないね」
「……。……いない、って、言ったら…？」
「じゃあここにいればいいのに」
「なっ……！わ、私、魔王だよ！？悪の元凶だよ！？な、何で何で、そんな、こ、と……」
「……なんで魔王泣いてるの？」

涙のせいでレイシューを見ることができない。

『ここにいればいいのに』

……この世界で、初めて言われた言葉だった。

「……だからフェイルは魔王を倒せないんだね」

泣き出す私にそのつぶやきは聞こえなかった。

「だからさ、別によそ者でもここにいたいんなら、いればいいんだよ。少なくとも魔王自身は悪いこととしてるんじゃないんだから」
「……ぅん」
「あ、でも勇者から『玲心の珠』をとるのは悪いことかも」

今、私たちはそこらへんの原っぱで体育座りしながら話してる。
私が泣き出したのがいけないんだけどね。
それにしても大人びた子供だなぁ。
まぁ、それで今私の心は救われてるんだけどね。

私は帰らなきゃいけない。いちゃいけない人間なんだから。
……でも、本心は帰りたくない。
帰って、またあの毎日を繰り返すのがすごく怖い。
……ここにいて、いいのかな…？

「きっと勇者も魔王におなじこと言うよ」
「……そうかな」

そういってくれたら嬉しいなぁ。
勇者様の、口から……。
…言われたいなぁ。

「そうだよ。……キーダ達まだかなぁ」

多分兄貴さんがごねてるんだろうなぁ。……ちょっとショック。

「ねえレイシュー。…ちょっと聞きたかったんだけど、あなたは、こわくないの？」
「なにが？」
「だって…村の人達は私を見てああなったのに、レイシューは最初から私を睨んだりは、…そういえばないよね」

戦うような子じゃないけどそれにしては敵意が全く見えない。見えなさすぎるくらいに。

「だって魔王はそうみえなかったんだもん」
「何が…？」
「魔ってのはみさかいなく誰かを殺すものだって先生におしえられたよ。…でも魔王、勇者しか襲わないんだもん。さっきだってキーダ達も庇ってたし」
「……だって、その、勇者様以外の人を倒してもしょうがないし、

それに、私は魔力で誰かを傷つけるのは嫌だな」
「…魔王は、バカなの？」
「うん、バカだよ。…胸はって言えることじゃないけどね。でも戦うことが天才になるんだったら、私はバカでいいよ…」
＜そうそう。逆にあなたみたいな性格はバカなほうが可愛いわよ？＞

……忘れた頃に出て来るなぁ…。
これは誉められてんのかな？
たぶんこの人にとっての褒め言葉なんだろうけど、素直に喜べない。

「……私、わからない」
「え？」
「私は魔王を倒すために頑張ったんだよ？でも今は…、わからなくなっちゃった」

レイシューはきっと今も悩んでいるんだと思う。私を倒すのか、見逃すのか…。
でも、私はレイシューの言った言葉よりも先に気になったことがあって、そっちのほうで混乱してしまった。

「え……わ、わたし？」

男の人で自分のことを、私、という人がいることは知ってるけど、レイシューのはなんか違う。
……あの言い方は、まるで…。

「……あの、レイシュー。性別…は…」
「？女に決まってるじゃん」

何を今更といった感じに言うレイシュー。

＜だからさっきから言ってるじゃない「おバカさん」＞

でも確かに間違えていた私も悪いけど！
レイシューは短い髪に男の子みたいな服着て、声がアルトなんだもん！
間違えちゃうよ！

あっ……レイシューが『君』づけを嫌がった理由がやっとわかったよ…。

●その頃の魔王さん（１３）（後書き）

めずらしく長くなりました（汗

●いまだに　ときめきな恋（１４）

ようやく納得したような兄貴さんとクリュウ君を連れて私は再びテレポート。
兄貴さんは相変わらず私を怖がってるし。
それにしても暗くてよかった。これなら私の涙は二人には絶対に見えないから。

とりあえず目的地は『あの村の宿の前』まで。
みんな布団で寝てるだろうからその中にレイシューを入れちゃえばいいよね。さながらクリスマスプレゼントっぽく！
あ、なんか楽しくなってきたかもっ

ちなみにレイシュー、さっきまで元気に遊んでたのにおねむの時間になったため兄貴さんの背中で寝てる。
本人は新しいお友達とお別れになるとわかってるはずなのに、人間誰しもやはり睡魔には勝てるはずがない。

と、考えている間に到着。何だかさっきまでの騒ぎが嘘みたいな静けさ。
あ、念のためフードを被ることに抜かりはないっ！

「じゃあ、行ってきます！」

兄貴さんはがたいがでかいから目立っちゃうし、クリュウ君はそもそも行く気すらない。
お見送りする兄貴さんはともかく、この人何しに来たんだろう…？

＊＊＊＊＊＊＊

あれ？勇者様はどこに行ったのかな。
レイシューはぐっすり寝てる。
大人びて見えても恐いもの知らずでもやっぱり子供。
で、他の人の部屋がわかんないから一応行ったことのある勇者様の部屋のベッドに寝かせてきたけど……肝心の勇者様の姿がない。
おトイレ？お散歩？
せっかく勇者様の寝顔が見れると思ったのに……。
少し、ちょっと、かなり、すごく、超絶、残念。
あ、私は寝込みを襲うようなまねはしないよ？
戦いは卑怯な真似はせず、いつだって正々堂々としないとね！
会えると思ったのに会えなくなったとなると妙に会いたくなる。

とりあえず勇者様の半径１０メートル付近にテレポート。
もうちょっと近づけばって思うかもしんないけど、だって……
……本当にトイレしてたら、気まずいし。
自然と顔が熱くなる。

と、着いた先は宿の外。
トイレでないことに安心して周りを見渡して勇者様を捜す、けど……。

「なっ、ま、魔王っ！？」
「珍しいな、こんな時間に」

……お邪魔だったかも。
だってだって勇者様と仲間のあの綺麗な女の人、……名前は忘れちゃったけど、その人と二人っきりだったんだよ？
それも夜中にっ！
……かなりショックだった…。やっぱ恋人なのかなぁ……？
平凡な私なんかよりもずっとずっと綺麗な外国人顔だし、髪も勇者様にそっくりでお似合い…。
私と勇者様は敵同士だから勇者様が私を恋愛対象とみることはないかもしれないけどでも、ショックなものはショックなのだ。

『きっと勇者も魔王におなじこと言うよ』

…レイシュー、言われそうもないよ。
恋人がいる勇者様にとって私は所詮敵でしかないのかな……？
好きになってもらえなくても私は勇者様が好き。
彼が好きでなくても、想うだけなら許される。
そう思ってたけど……やっぱ苦しいなぁ…。

＜どうしたの？あれが勇者なんでしょ？『玲心の珠』取らないの？
何をぼんやりと……＞

そういえばこの人、私の思考は読めないんだったっけ。

＜あ、わかった。あの人にお熱なんだー＞

あっさりと見破られた。
ひゃぁっ！ほ、他の人から言われるとかなり恥ずかしい！
私の顔が急速に青から赤へと信号機みたいに色が変わる。

＜照れない、照れない♪＞

完全におもちゃ扱いだぁ～！

「魔王、レイシューはどうしたんだ？」
「……ぇ、あっ……の…、あなたの、部屋、で、寝てます」
「ほら、やっぱりな。てか顔赤いぞ？」

やっぱりってどういうことだろう？
というか待って！勇者様がこっちに向かってくる！
いつもだるそうにしてるのに、木の上からわざわざ降りて歩いてくる！なんで！？
ただでさえあの人のせいで心臓バクバクなのに今来られると止まっちゃうよぉ！
さっきまでの気の落ち込みが嘘みたいだった。
勇者様の目をみることができないぃ…。

●いまだに　ときめきな恋（１４）（後書き）

３／７（月）、間違い直しました。

●変化した　情熱の愛（１５）

「ちょ、ちょっとちょっと！ダメよ！」

はっ！そうだ恋人さんがいたんだった！
恋人さんが勇者様の前に立ちはだかっている間に私も慌てて距離をとる。

「…フィアナ、納得したんじゃなかったのか？」
「理解はしたけど完全に納得したわけじゃないわ。というかあなた無用心すぎるのよ」
「お前ついこの前『ちゃんと相手しろ』って言ってたじゃねえか」
「言ったけど魔王相手に油断しすぎよ。『玲心の珠』を取られたらどうするつもりなの？」

えっと……痴話喧嘩？
私が原因でカップルに亀裂が！何とかして止めないと…！

「あの」
「こいつはそんな卑怯な真似は絶対にしない」

何か言おうと口を開いたけど、金魚みたいにぱくぱくいって終わり。
恋人さんが前にいるおかげで勇者様に見られなかったのはすごく助かった。

＜あらあら。あなたすっごく信頼されてるのね～。あなたの大好きな人は仲間に刃向かっちゃったわよ～？＞

だって、きっと私は今タコみたいに真っ赤だと思う。
声の人が冷やかしてくるけど何も言い返せない。
それどころじゃない。

…すっごく、嬉しい。
胸が熱く鼓動してる。

＜……どしたの？＞

嬉しいの、すっごくすっごく！
私、前にいた所でね、失敗ばかりだったの。
だから、だからね！勇者様に言われたことが嬉しい！

勇者様の口からだよ！？
勇者様、敵なのに私を信じてくれてる…！！

……うん、やっぱり、好き。私は勇者様が、好き。
恋はときめき、愛は情熱のらぶ。
私は昔からそう思ってるの。
だって恋をしている間はすっごく胸がきゅんきゅんするけど、これが愛情にかわるとそれどころじゃない。
私は絶対一生この人に恋し続けるの！
でもラブまではさすがに勇者様には迷惑かな？
そこらへんはちゃんと一線作っとこう。

「大丈夫！今日のところは取りませんから！」
「え…」
「それじゃあ勇者様。次こそは取らせてもらうからね」
＜…案外あっさり引き下がるのね。獲物は目の前なのに…＞

当然！
レイシューは返したから目的は果たしたし、これ以上私がここにいてもややこしくなるだけだしね。
それに、…目の前に恋人さんがいるから、お邪魔虫になっちゃう。
私は勇者様が一生好き。それはきっと地球に戻ってもかわらない。
できることなら、もっともっと仲良くなりたいし、……お付き合いだってしたい。告白だって、したい。

だけど、理想と現実はまったく違う。
勇者様とお付き合いできたらな、なんて何十回と想像したけど現実では目の前には勇者様の恋人さんがいる。
そしてレイシューには「ここにいてもいい」って言われたから一応考え中だけど、私には地球に帰れる可能性がある。
戻ってからは会えもしないのに勇者様だけを想うのは絶対苦しいに決まってる。
でもでもでも！好きなものはしょうがない。
…かなり、複雑な気持ち。

「あ、おい、魔王！」
「っ！な、なに？」

シャニアさんのいる城にテレポートしようとした途端だったからびっくりして急ストップ。
でも魔力状態が微妙な感じになっちゃったから、止まっているというよりは遅めになっただけ。
いつもなら発動の４秒ほどで転送だけど、この状態だとあと１５秒もしたら勝手に目的地に飛んじゃうから、勇者様と話すのに充分の時間。

「お前名前は？」
「……はへ…？な、まえ…？」
「魔王でも名前はあるだろ？何て言うんだ」

「…ミ、オ…だけど…」
「よし、次に会ったとき俺に気力が会ったときこそ『紅心の珠』はもらうからな、ミオ」

未緒。
どれほどその名で呼ばれなかっただろう。
ファグアラネルでも。……地球、でも。
大失敗ばかりで名前を呼ばれることは減っていってた。
久しぶりに他の人から聞いた、私の名前。
それも、勇者様に…。

「あ……ゅ、勇者様の、名前は！？」

時間がきて勇者様の姿が消えゆくなか、私は聞き取りづらかったけど確かに聞いた。

「……ふぇいる…」

それが勇者様の、名前。
すぐ近くでシャニアさんが何か言ってるけど私には聞こえない。

……いたい。
私、この世界にいたい。
……名前で、呼んでくれる、ここに。
恋人がいても、勇者でも、報われなくても、私はあなたが好きだから…。

ここで、あなたに、永遠の恋を…愛をしたい。

「……遅い…っ！！」

「……寒くなってきたな…」

魔王様、ご兄弟を帰すのをすっかり忘れてらっしゃいます。

●変化した　情熱の愛（１５）（後書き）

あのあと二人は通りかかった村人に見つかってしまったので、慌てて山に逃げ帰りました。
シリアスだったのに台なし（汗）

今更ながらの人物紹介（前書き）

ネタバレについては散々悩んだ結果、無しにしました（汗

今更ながらの人物紹介

みなさんどうも、満月（みつき）　氷（こおり）です。

始まりがあんな感じでしたのでこれから人物紹介します。
…始まりをなんであんな感じにしたのか正直自分でも分かりません（汗
できることならば随時更新しますので！

あ、ちなみにタイトルの最初にあるマークですが、
●魔王　■人間（女）　▲魔の者（女）
○勇者　□人間（男）　△魔の者（男）　◇不明（もしくは秘密）
です。
今回は自己紹介ですので一応◇にします。

＊＊＊＊＊＊＊＊

このファグアラネルの世界には三大国があり、この国が主にでてきます。

・龍の王が仕切る豊かで自由な国、『アスフォン国』

・勇者一行の出発点であり身分差別が厳しい国、『トラウジェナ国』
・トラウジェナ国の隣国で学問と信仰の国、『カロバート国』

＊＊＊＊＊＊＊

◇魔王　　西野未緒（にしのみお）　１７歳
黒目にセミロングな黒髪で平凡な少女。　地球出身。
『紅心の珠（こうしんのたま）』を身体に宿してしまった生粋の日本人少女。
高校２年生になりたての頃にファグアラネルにとばされてしまった。
内気だけど前向きで純粋な性格、でも負けず嫌いでお子様な小心者。
（いきがる小動物）
前向きといってもかなりのポジティブではなく、たまにマイナス思考になってしまうほど。

◇勇者　　フェイル＝スタリンガード　１９歳
金髪碧眼の美青年。　トラウジェナ国出身。
『玲心の珠（れいしんのたま）』を身体に宿してしまったファグアラネル人。

元からめんどくさがりな性格だったが『珠』を宿したことで更に磨きがかかった。
頭が回るタイプ、でもちょっと鈍感。

＊＊　勇者の仲間　＊＊

◇フィアナ＝スタリンガード
勇者の仲間の魔法使い。勇者の義理の妹。
長髪で勇者と同じ金髪だが、瞳は琥珀な美少女
国に恋人がいる。唯一、勇者の想いに何となくだが気づいてる人。

◇ベルガ
勇者の仲間の剣士。
短髪の茶髪に茶色の目。
かたい性格で疑り深い性格。

◇レイシュー
勇者の仲間の魔法使い。
淡い金髪に琥珀の瞳の子ども。

◇リッツェル
勇者の仲間の研究員。

紫の長髪に薄桃の瞳の女顔。

＊＊　魔の者たち　＊＊

◇シャニア
魔王（未緒）専属のメイド。

◇魔の者
ファグアラネルで人々を襲う魔物。

＊＊　アスフォン国　＊＊

◇依琉（イル）
４歳の頃に地球からファグアラネルの「アスフォン国」へ吏一と一緒に異世界トリップした。
ハーフのため薄茶の髪に青の目。　明るい女の子。　１７歳
アスフォン国では女性の結婚は「１８歳以降」なので、まだ吏一の婚約者。つまり次期王妃。

◇吏一（リイチ）
６歳の頃に地球からファグアラネルの「アスフォン国」へ依琉と一緒に異世界トリップした。
地球に居た頃は黒髪に黒目だったが、一度ドラゴンの姿になってからは青髪の金の目。　１９歳
現アスフォン国王で無口で無愛想。

＊＊　その他の人　＊＊

◇キーダ
クリュウの兄。
２メート以上もある巨体な身長。

◇クリュウ
キーダの弟。
兄の使い方が上手い。

◇ベタ
『ヤットとラータ』から生まれた希少種。
イルのお気に入り。リイチの嫉妬対象。

今更ながらの人物紹介（後書き）

７／２０、依琉と吏一の説明を追加しました。

ー番外ー　●出会い？（前書き）

どうも文章が短すぎてしまう……！
なるべく区切らないようにしたいのですが、各話長い話がお好きな方はすみません！

ー番外ー　●出会い？

……気をつけなければ。見つかってはいけない。
そろり、そろりと、出来るだけ離れて……。

「魔王様、どちらへ？」
「げっ！！」

未だにこの呼ばれには慣れない。
振り返ってみれば金の目に黒の髪、だがお団子にしている部分だけは金髪の美女。
真っ暗で真っ黒な廊下に眩しく光ってみえる。
たぶん髪をおろしたら長い髪は上が黒で下が金の半分に分かれるんだと思う、不思議な髪。
でもなんだか見てみたい気もする。
それはともかく今見つかっては困る人。

「シャ、シャニア、さん……」
「明日はいよいよ勇者との対面の日、……だというのに、こんな真夜中にどちらへ？」
「ト、トイレ……かなぁ？…シャニアさん…は…眠らないの？」
「わざわざ廊下に出なくとも部屋の中にあるではありませんか。それに私は負傷時でもない限り、睡眠は必要ではありませんので」

「そ、そうですか……」
「ちなみにこの城にいる半分の魔の者もそうです。……それで？うら若き乙女がこんな夜半にどちらへ？」
「……その、あっ！そうお腹が空いて！」
「残念ながらただ今厨房に残り物などございませんし、……今入ればあなたが材料になってしまう可能性がございますのでおやめください」

なにっ！？今台所に何がいるのっ！？

「…それで？」

……もう何を言っても、嘘は無理そう。

「……勇者の姿を偵察に「いけませんっ！！」」

……言うと思った。

「女性が真夜中にそれも敵の元へなんて問題がありすぎです！それに勇者がもし男だったらどうするんですか！？色んな意味で！」

色んな意味ってどんな意味…？
相手が男だったら力では勝てないってことかな？

「だ、大丈夫っ！ただ一目見たらすぐに帰るし、見つからないようにするし、そ、それに今の私には魔力があるし！」

魔王の私は他の魔の者よりも魔力の量が大きいらしい。
たぶん今の私は無敵状態なんだと思う。
だから安心だよ！
…でも『玲心の珠』はを手にしたらどんなことになっちゃうんだろう…？

その時、私の言葉で途端にシャニアさんの顔が無表情になった。
綺麗で、神秘的な顔が、まるで昔持っていた人形のように…。
……怖い…。

「…言っておきますが、その莫大な魔力は本来ならば人間のあなたには備わっていないのです。……人間風情が持つべきものではない」

「…っ」

いつもならば軽く言い返せるのに、今はできない。
それほどまでに今のシャニアさんが恐ろしい。
魔力が強いわけでも顔が怖いわけでもない。
ただ、この言い回し、この威圧、この感覚。
顔も声も口調もあの人とは全然違うのに、今のこの人は昔のあの人を思い出させる。

「……己の力に、過信しないでくださいね」
「……はい…」

……とても勇者に会いに行く気分にはなれなくなってしまった。
また『失敗』してしまった。
確かにどうせ明日は勇者のもとに行くのだから休めばいいのだけれど、魔王の私は勇者に狙われているのだ、明日が不安で眠れない…。
わざわざ会いに行くなんて危険な真似をしなくてもいいかもしれない。

で、でも……見るだけ、見るだけだから！
眠れないからベッドの中で勇者の姿をいろいろ想像したけど、やっぱりどれもびみょ～。
となると、勇者の顔が急に気になって来たから、もうどうしようもないの！

「……で、でも、その」

怖いけど、こうなってしまえば戻ってベッドで寝ることなんてもう無理！
私にしては珍しくシャニアさんに反抗してみた。
というより反抗しようとした、……けど。

「や、やっぱり、何でもない！」

……恐怖のほうが勝ってしまった。
情けない！私の弱虫！意気地無しぃ！
何で言いかけてやめるのぉー！？
……諦めて、部屋に戻ろう。
思えば私が人生の今までで『成功』なんてしたことはほんの少しだった…。

……と、思ってたら

「……申し訳ありません。少し、言いすぎました」
「へ……？」
「私はただの世話係。魔王様の行動を制限する権利はございませんでした」
「えっ、あ、いや、わ、私がいけないから！」

いきなり謝られてしまった！
シャニアさんが謝る必要なんてどこにもないのに！！
私は他人に謝られる資格なんてないっ！

「だ、だから、謝らないでぇっ！」
「いいえ、私が悪いのです。ですので魔王様はどうぞお好きな所へお行きください。……ですが、世話係としての意地もありますのでどうか夜分の行動は今夜だけに……」
「えっ……」

『どうぞお好きな所へお行きください』
この言い方は見放されたわけでもなく、放っとかれるわけでもなく、はたまた怒っているわけでもなく、滲み出てるのはただの呆れだけ。
逆に、今回だけは見逃してくれるという言い方。

シャニアさんひょっとしてわざとやってくれた……？

○出会い？

今日は国の近くの小さな町に泊まることになった。
トラウジェナ国をようやく出発してから今日で……まだ一週間か。
俺のなかに『玲心の珠』が宿ったことが判明したのはずいぶん前で、
それまでただの庶民でしかなかった俺は城で剣技や勉学の最低限を
短期間でかなり叩き込まれてしまった。

……正直に言おう、魔王を恨む。『珠』も恨む。ついでに教育者
全員も恨んでやる。
城ではめんどくさくて仕方がない日々だった…。
それまで俺はただのんびり自由気ままに暮らしていたはずだ。
そしてこれからもそうなる一生だと気楽にしてたのに、知らぬ間に
俺の中に『玲心の珠』が宿っているという。

そんなの関係あるかっ！！俺の平穏を返せっ！！

こういったら周囲に睨まれるだろうが俺は正直魔王とか『珠』とか
勇者とかどうでもいい。
たぶん、俺にはそこまでして生きる気力はないんだと思う。
魔の者が来ても俺はそこそこ抵抗はするがプライドを捨てて生にす
がることはないだろう。
……いつからこうなったのはわからない。
何をしてもやる気など起きない、ただ周囲に流されてやっているだ
けの毎日だった。

「フェイル～！」

と、部屋で思考にふけっているとレイシューが部屋に入ってきた。
ちなみに基本的な部屋割りはレイシュー&フィアナ、ベルガ&リッツェル、俺一人になっている。
本来ならば「勇者を一人部屋にするか？」という話しなんだが、これは俺の独断で決めたことなんだ。
何が嬉しくて宿の中でまで一緒に居なければならんのだ。
特にベルガとフィアナの徹底ぶりがひどくカンに障る。
野宿の時、二人は交代で見張りをしている。レイシューはまだ子供だし、リッツェルはそもそも城から派遣された研究者だから見張りなんてする必要がないし自分から見張りなんてしないだろう。
仮にしたとしても、それは見張りとは言えない形になると思う。

「どうした。もう夜遅いのにまだ起きてたのか」
「フィーがまほうの本よんでていっしょにねてくれない。だから勇者とねにきた！」

あいつ……熱中すると回りが見えないフィアナの悪い癖だ。
特に魔法関係ときた。
もしこれで本が分厚いのなら朝まで読み続けるに違いない。
まぁ幸い明日はこの町で一日留まるらしいから旅に影響はないだろう。

「……めんどうだから」「いっしょにねるのはいいけど、子供をねかせるのはめんどうだからいやだ、っていいたいんでしょ？そこまで子供じゃないよ！ただとなりのベッドでねるだけだもん。二つあるから、いいよね？」

……レイシューを侮ってはいけない。
レイシューはかなり頭がいいのはそういう教育をされてきたからだ。
さらにはまだ小さいのに治癒の魔法まで覚えてしまっている天才だ。
だがそれは普通の子供よりかは頭がいいというだけであって、旅をしてても身体や精神は他の子供と変わらない。
昼寝だってするし、体力だって極端に低い。たまにだがわがままを言う甘えん坊の子供。

「それならよし。じゃあもう寝るか」
「……」

って、もう寝たのかよ！さっきまであんなにくっちゃべってたのに！
……よほど眠かったのか。
明日はこいつのためにもフィアナに注意くらいはしてやるか。

「……魔王」

どんなやつなのだろうか。
確か前回は魔の者の女がなったという。
今回は人狼だろうか、それともまた魔の者か。
まさか人間のはずはないだろう
男か、女か、メスか、オスか。
……ダメだ、まったく想像がつかない。
まあ会えばわかるだろう。いやそれは当たり前か。
とりあえずこれ以上めんどくさいことにならないことを願うばかりだ。

だが意外にもそのすぐ後、俺の第一の願いは届き、第二の願いは無情にも続くはめになるとはその時の俺にわかるわけがない。

その日のたぶん深夜。

目を閉じてもなかなか眠れなかった俺は何度もごろごろしていると
なにやら違和感を感じた。
違和感というより、何者かの気配がするのだ。
でもいっこうに動く気配がなくただ見られているだけのようだ。
誰だよ、俺の時期に来るであろう安眠の睡眠を妨げたやつは…！
俺は目を開けずに考えてみた。

レイシューだろうか？
でもあいつはぐっすり寝てるはずだし、用があってもじっと起きるのを待っているわけがない。

ならば様子を見に来たフィアナか？
いや、あいつは一度くいついたらベルガ並に頑固だしリッツェル並に腹立たしいからそう簡単に読書を中断したりしないだろう。
それに本を読み始めるまでに部屋割のことで少し言い合ったから、どうせイライラ解消にでも本を読んでいることだろう。
あいつは昔から周りにあたったり自身のストレス発散法を知らないが故に、自分の好きなことに熱中することで怒りをしずめていた。

ベルガはこんなきもいことしないし、リッツェルの場合は今頃俺は実験台になっているだろう。

……じゃあ、いったいこいつは誰なんだ？
いっそのこと殺気でも出してくれれば一思いに倒せるのに、ただ観察するだけ。

「……わぁ…」

しばらくすると近くで感嘆するような声。
……女？……それも若い…。
思いきってゆっくり目を開けてみる。
さっさとそうしてればよかった。
そうすれば俺の目に輝いてうつった少女をもっと早くに見れたのに。

○出会い？

目を開けて最初にみたのは頬を染めた少女のきょとんとした顔。
いや、少女といっても十代後半か。
薄暗かったが彼女の濁りのない真っ黒な目と俺の青の目がぶつかる。

俺はもちろん、彼女もぎくりと固まった。
彼女が驚いている理由はもちろん寝てると思っていた俺がいきなり起きたからだろう。

「……」
「……」

両者無言のまま相手から目がはなせない。
目の前にいるのは明らかに魔だ。
いや、……魔王だ。

勇者としての直感なのかもしれないが、俺には確信があった。
黒目黒髪の人型でうっすら白い肌に少しだけ童顔な顔。
なぜ魔王が真夜中に俺んとこに来て、なぜ彼女は真夜中に暗い中で寝てる俺を見ていたんだ？
本当ならここで逃げるなり切り掛かるなりすればいいんだが、俺はどうしても目を離せなかった。

理由はわからん。

だが殺伐とした雰囲気ではないのは確かだし、俺の中ではこの時何故かいつもと違っていた。
どこがって言われるといつもならすぐに頭の中が切り替えられるのに、例えば『彼女が光り輝いてみえる』とか『いつまでキョトン顔なんだ。おもしろいやつ』とか『なんか俺の心臓バクバクしてんぞ』とか『なんで俺こいつの顔から目がはなせねえんだろう？』とか『いつまでこのままなんだ？…まぁ、いいか』とか思ってたりする。
……なんなんだろうか、これは？

隣で寝てるレイシューもまさかすぐよこに魔王がいるなんて思いもしないだろう。
いつまで動かない勇者と魔王。
沈黙を破ったのは向こうが先だった。

「あ、あああなたが…勇者、様？」
「…そうだけど？」
「こ、こんにちは、魔王です！早速ですけど…『玲心の珠』、も、もら、もらったぁー！」

と、いきなり俺の胸に手を置こうとする魔王。
そしてようやく我に返る俺。
魔王に見とれてしまいまんまと『珠』を盗まれる勇者。
……そんなのカッコ悪過ぎるだろ！
俺は条件反射でベッドから飛び離れると同時に枕元にあった剣を掴み、窓付近へと身を寄せる。
城でしごかれた成果というものは俺にとっては嬉しくもなんともな

いものだな。
俺は次に来るであろう攻撃に身を固めた……が。
またもやポカーンとマヌケな顔をしだした魔王。
あまりのほうけように俺の体も緩んでしまう。
……何やってんだこいつは？
よくみれば顔がどんどん上気してきてる気がする。

「……ひゃぅ～…っ！」

かと思えばいきなり真っ赤な顔を両手で覆い始めた。
完ぺきなる油断の姿。さっきまでの威勢はどこにいったんだよ。
これも作戦のうちなのか？

……でも、なんとなく抱きしめたくなるその動作。
なんだ、その、……あれだ、周りにこんなやつは今までにいなかったからだ、きっと。
だから……だから、そう、妹的なやつだ！
あれ？でも妹に抱きしめたいは変だよな？
待てっ！俺も混乱してきたぞっ！！
そしてまた何もしない時間がしばらく過ぎていった。
我に返ったのはまたしても魔王が先。

「はっ！！あ、あの、『玲心の珠』、を……そのぉ」

なぜ目を逸らす。かくいう俺も魔王の目を見ることは出来ないんだがな。

「……普通に考えて、渡さねえからな」

とりあえずこれだけは言っておく。
お前だってこの状況で渡すわけねえだろ。
……あれ？こいつだったら別に『紅心の珠』を盗るのに悪戦苦闘する必要ないんじゃないのか…？
見た目明らかに弱そうな魔王だ、魔力にさえ気をつけていれば魔の者を呼ばれずにかつ楽に盗れてそして旅が終わる。
……あまりに呆気なさすぎる。
まだ旅を始めて一週間だ。
これでは俺はたった一週間のために辛くめんどい一年を城で過ごしたことになってしまう。
…普通に考えて、ふざけんなっ！
俺はそのためだけに一年放棄したわけじゃねえんだ。
少なくとも長期戦にしてくれなきゃ割にあわねえよ。
こんなおバカな性格してんだ。別に盗るのは次の機会でもいいよな。
……なぜか今はまだ、取りたいとも思わねえし。
と、ものぐさの俺にしては珍しい考え……だったのによ！

バァンッ！

「何事だ！？」

来るの遅すぎるだろっ！
つーか来なくてよかったんだよややこしいっ！
……人生ってそう都合よく行かないもんなんだな。

「っ！！貴様…もしや魔王かっ！」

やってきたのは声でわかる通りベルガ一人……ではなくもう一人いた。

「魔王ですって！？」

なるほどフィアナのほうで時間がかかってしまったのか。
意地張ってベルガの話を本気で聞かず机にかじりつきでもしたにちがいない。
ベルガは俺の部屋の異変にいち早く気付いたのだが、自分の力量をわかっているあいつのことだ。単身で殴り込んでも勝機は薄いかもしれないから人手にフィアナを選んだんだろう。

……結果的には来てくれたが、だいぶ苦労したことだろう。
って、そんなことよりも……。

「えっ……えぇーっ！？あ、いや……えっと、そのぉ……ぁ…」

みろっ！魔王が急な闖入者に怯えちまってるじゃねえかよ！脅かすな！！
……。……なんで俺は言い返してるんだ？しかも自分仲間にだぞ？
普通ここは魔王を邪険にするのが正しいだろう。
別に魔王が怖がろうが悲しもうがなんとも思わないはずだ

……あぁ、くそ！考えんのもめんどくせえ！
とにかくこんなやつなんだからチャンスはいくらでも現れるはずなんだ。
今回は何とか逃がさなければ…。

「これが……こんな女の子が、魔王…？」
「あの黒髪黒目は間違いない。……一気に叩き潰して『紅心の珠』をとるぞ…！」

おい、ちなみに倒すのは勇者の役目だし、『珠』を取るのも勇者に

しかできないことだからな。
このベルガとかいう筋肉バカ男。使命感に燃えるのはいいが、変なとこで空回りしてやがるな。

○出会い？（後書き）

ベルガはもっと渋くなるはずだったのに…
どんどん残念な人になってしまいます。（汗

●出会い？

怖い顔をした男の人がいきなり私を取り押さえにきた。
ひゃあっ！これは取り押さえというよりも押し倒したが正しいよ！
へ、変態！誰か助けてぇ！
顔が怖くて三十は越えてそうなおじさんが女子高校生を押し倒してるよ！

「フィアナ！今のうちにあいつを逃がすんだ！」

しかも両腕掴まれてるから身動きが取れない！
大の大人に少女が勝てるわけないでしょぉ！

これは私の油断が招いた結果だから私が何とかしなきゃいけないんだけど…うぅ…、出先でシャニアさんにああいったけど、実は私まだ魔力を完全にマスターしたわけじゃないの…。
一応テレポートはなんとか出来るようになったけど、こんなパニック状態じゃどこに飛んじゃうかわかんないし…。

『……己の力に、過信しないでくださいね』

シャニアさんからちゃんと忠告されたのに、ちゃんと前以て注意されたのに、それでも私はちゃんと聞いてなんていなかった。

魔力という魔法の力を手に入れた。
だから大丈夫。
絶対に誰にも負けない。

…そんなことあるわけがないのに。
今から何をされるのか、私の油断でもうあっさりと殺されてしまうのかわからない。
誰かたすけて…！

「ち、ちょっと！さっさと逃げるのよ！？」
「いいからお前は黙ってろよ」

と、勇者の声がどんどん近づいて来てることに私は気付いた。
あれ？確か勇者はあのかなりの美人外国人さんに連れられて離れたんじゃなかったっけ…？
そう思っていると、いきなり私の視界からあのむさくてごつくて重くて気持ち悪くて汗くさいむさ苦しいおじさんが消えた、……と思ったら私のすぐ脇に倒れただけだった。
…なんか頭押さえて苦しそうな顔してるけど、自業自得だぁ！年頃の女の子を床に押さえ付けたんだから！

でもなんで急に倒れたんだろう？
言っとくけど心も体も人間で魔力技術が未熟な私には相手を倒すとか全く出来ない。
物が落ちた感じでもなかった。つまりこの部屋の誰かがこのおじさ

んを殴ったわけだから…。

「女のしかも子供相手に用心しすぎだろう、ベルガ」
「このっ…！何をするか貴様っ！！」

美人さんはドアのところで口を開けたまま固まってる。でも美人だからそれさえも綺麗に見えちゃうから羨ましい！
そして美人さんの腕の中にはさっきまで勇者の横で寝ていた子供。こんなにも大声や騒音でどたばたしているのに起きないなんてどんだけ寝入ってるんだろうか。
…で、気持ち悪かったおじさんはすぐ横で頭を押さえてるから、この人を殴ったのはただ一人。…一人の、絶対にありえないはずの人物。

なんで勇者が仲間を殴ったの……？
私を……助けた？いや、そんなはずはない。
だって私は魔王だし勇者もそれに気付いてる。
敵を助ける理由なんてない。
私がファグアラネルに来てから初めて人間に会ったとき、町の老若男女全ての人から疎まれた。
だから今回も嫌われるはずだから…。
私が呆然としてる間にも二人は会話を進めていく。

「魔王相手に女も子供も関係あるものかっ！相手は敵だ！勇者なの

に何故庇う！？」
「庇ったわけじゃねえよ。それに勇者、勇者って……、勇者は必ず全部の敵を倒す義務なんてないだろうが。こいつが魔王？俺は今初めて知ったんだ。…俺はお前を助けたんだよ。その理由は三つ。一つは魔王相手に危機を感じた俺はお前を助けるためにお前を殴った。二つめは…」
「最後のは変だろうがっ！何故魔王じゃなくて俺を殴るっ！？」
「会話を遮るなよ。二つめは」
「質問に答えろ！」
「二つめは、会話の流れがめんどくさい方にいってたからお前を殴った」
「～～～っ！！？」

顔を真っ赤っかにして怒りのあまりか声にならない叫び声をあげるベルガさん。
その時にしてようやく私は正気に戻った。

仲間割れしてるっ！い、いまのうちに、逃げないとっ！！

これ以上ここにいてもチャンスは絶対にこないだろうし、遅い私を心配してシャニアさんが迎えに来ちゃうかもしれない！
シャニアさんが来ちゃったら新たな魔の出現によって今度こそ、いやさっきよりもさらに殺気立っちゃうかもしれないよぉ！
し、集中……集中ぅ……。

「……えぃっ！」

神経集中で魔力をためてテレポートする。
今の私はかなり集中しないとどんな変な所に飛んで行っちゃうかわかんないから。
ともかく、勇者とその仲間は会話に夢中だから私の魔力集中には気付かなかったみたいで、おかげで私は無事にその場から逃げることが出来た。

…勇者は、きっとこのあと怒られることだろう。
勇者のアレは……、たぶん、気まぐれなのかも。
だって勇者は他の人に比べて、全く戦う様子をみせなかった。
それどころかめんどくさそうな顔してたし……。
うぅ……あんな顔しなくてもいいのに…。
もしかしたら勇者は今戦うのが嫌だっただけで、故意で私を助けたんじゃないのかも。
その理由はわかんないけど。

……たぶん、そうだよね。ううん、絶対そう！
私はこれからも『珠』をとるめにあの人に会うのかぁ…。

テレポートで移動するその数瞬の間、私の胸の中には倦怠感や恐怖とは違う別の想いがあることに、私は気付いてしまった。

「三つめはこの魔王が弱そうだからだ。なんかいつでも倒せそうじゃねえか」

彼が言ったこの言葉。その場に消えた魔王に聞けるはずもない。この言葉が勇者のその場しのぎのために言った『嘘』とはいえ、あの時魔王がこの言葉を聞いていたら、きっとその気持ちは生まれなかったことだろう。

●出会い？（前書き）

最初は魔王の過去について、後半は思考？についてなのでちょい暗め。
過去については別のほうで考えていたのですが、収集がつかなくなったのでこの回に一部だけ載せるだけにしました。（汗

●出会い？

ここは私の部屋。さらに言えば魔の者の城にいる。
そして私は自分の部屋の魔王専用ベットという名の大きな布団でごろごろしていた。
しかもただのごろごろじゃない。
枕を押し付けながらの高速ごろごろで、今の私は誰にも止められない！
理由は単純で、……ただ単に悶えてただけ。

勇者が、あんな、あんな……かっこよかった、なんてぇ……。
一目惚れ。
そんなことが起ころうとは数分前の私には想像もつかなかった。
これが……これが、恋なのかぁ…。
最初は一目惚れだとは気付かなかったけど帰るときに気付いてしまった。
どんだけ鈍いんだ私は。

昔、本やアニメとかでみた王子様みたいな、まさにイケメンでかっこいい勇者。
いや、もう勇者じゃなくて勇者様だよ～…！
勇者様の顔を再び思い出して一人はしゃぐ私。
別に他に誰も見てないからいいもん。

薄暗かったのに、染めたのではなく地毛だと一発でわかる長く綺麗でさらさらした金髪。
太陽とかに照らされたらキラキラ光る、そんな感じに綺麗だった。
……思わず、触りそうになってしまったくらいに。
起きぬけのあのちょっと長い髪が肌にくっついてるところとかもち

ょっと抜けててかっこいいし……何と言っても、あの顔！あの声！
すっごくかっこよくって……目を覚ました勇者のあの青い目とぶつかったときにはもうハートは射ぬかれてしまった。

……はうぁ～…そうだよねぇ、勇者様だもんね。
物語の勇者様はいつだってかっこいいもんねぇ……はぁ～…。
出来ることならお近づきになってお喋りして仲良くなって手を繋いで、それからそれから…さ、最後は……ひゃあ～！
む、無理だぁ！あんなかっこいい人が私を相手にしてくれるわけがないし、そもそも近づくだけで緊張しちゃうんだもん！

それに何よりも私は……魔なんだから。……私はこの世界じゃ魔であり、『よそ者』だから。
このファグアラネルになじむ前に帰らなきゃ。
早く、早く帰って地球の時の私を思い出さなくちゃ！

地球にいる時の私はいつだって失敗ばかりで、私がでしゃばっちゃうときはいつも誰かを必ず不幸にしてた。

きつい性格の母と小心者な父。
あの日、私のドジが原因で父の隠れた浮気が母にばれた。
以後、私は父に疎まれ新しい母にはいつも何か言われ続けることになる。
それが幼稚園児の頃の話。

それからは小学校、中学校、高校では誤解や余計なお世話が日常茶飯事。

例えば、道に困ってる友達に正反対の道を教えてしまったり。
例えば、急ぎすぎて道端の子どもの頭に鞄をぶつけてしまったり。
例えば、約束を忘れて寒空の下でずっっと友達を待たせてしまったり。
例えば、友達の好きな男の子にその娘の気持ちをうっかり話してしまったり。
例えば、その人が転校するわけでもないのに勘違いしてお別れ会を企画しちゃったり。
例えば、大事な時に前の人の足を踏んじゃったり。

地球にいたころよりかはファグアラネルでの生活は、周りの人間は自然と避けてくし失敗の数は格段と減ったけど、失敗は本当にたまにだけど起こってしまう。
全て些細なことかもしれない。
そんなことぐらいで、って思う人もいるかもしれない。

でも、私の今までの人生の半分が失敗でおさまっている。
いくら些細でも、軽くても、その数があまりにも多すぎた。

恥ずかしく哀れな失敗ばかりの学校生活を送り、友達と呼べる存在はどんどん減っていった。
いることにはいるが私にはあまり関わろうとはしないし、元友達は廊下ですれ違うたびに舌打ちをされる。

……気にしてないわけが、ない。
彼氏いない歴＝私の年齢＝つまり私の生涯は全てうまくいかず色んなものを台なしにしてきたのだから。

もっと上手くやりたい。
もっともっと色んな人の役に立ちたい。
もっともっともっとたくさんの人に好かれたい。
…だから私は気持ちだけは前向きになる努力をする。
暗い気持ちで人を救えるとは思わないし、それでは私の気分も暗くなってきてしまう。

……でも、それでもやっぱり思い通りには全くいかない。
前向きになっても後ろ向きになっても、私は結局は変わらなかった。
……私はいつになったら人を喜ばすことが出来るの…？

半ば諦めと悲しみと悔しさが混じりながら空を見上げたときだった。
いきなり私の上空、というよりも頭のすぐ上に黒いような暗いような暗黒的な空間が浮かんだと思ったら急に目眩がした。
コーヒーカップで長居したようなぐるぐるした感覚から覚めたときにはもうすでに私の知っている世界などなかった。

ーーチャンスをもらった

人、いや人ではなかったけど、とにかく誰かを救うチャンスを私はもらったんだ。
目の前の美人外国人みたいな人は挨拶の後に確かに私に言った。

ーー「貴女様の手で勇者を倒し、我々を救っていただきたいのです」

後で知ったことだけど人間に頭を下げることは恥以上のことらしい。
それでも下げたのは、無理矢理やらせて自害してはもともこもなく、
それは私にしか出来ないことだったから。

……私にしか救えない。

……あの人達はそうまでして私の手が必要。
私は迷わなかった。
迷う理由もない。

そして私が思う理想は自然とこうなった。

このファグアラネルを救う。…より正確には魔の者達を救う。
でも私は用がすめばこの世界では邪魔者。
だから早く地球に帰って、この経験を活かして、ようやく私はたくさんの人を幸せに出来るはずなの。
これが成功すれば、私はもう『失敗』なんてしないんだ。
そして、……色んな人と本当に仲良くなる。
高校一年生の頃は無理だったけど……でも、でも今度こそ、二年生になった今こそ、楽しい高校生活を送れる！
それが私の理想だったのに…。

今の私は変わった。
もちろんまだあの理想の夢を捨てたわけじゃないけど、確実に私の何かが変わってる。

あの人に会ってしまった。

色んな人と知り合えた。

魔の者を救っても彼らが救われないことに遅ればせながら気付いてしまった。

色んなことが起こり、色んなことを知り、……私は、どうすればいいんだろう。

●出会い？（後書き）

勇者がベルガによってこっぴどく叱られてることを彼女は知らない。
というか魔王が関わるとたいていがお説教タイムになってますね。

そしてベルガはそのことにすら気付いてません（笑）

―４― ●相談事（１）（前書き）

「人物紹介」に依琉と吏一の紹介を載せました！

―4― ●相談事（1）

「……そういうわけで、どうすればいいかなぁ…？」
「う～～ん。つまり好きな人は敵でしかもその人には彼女がいて自分なんか不釣り合いなほど見た目がお似合いだから諦めようと思ったけど相手の不意打ちな一言で諦めきれなくなった？」

ここは魔の者の城……じゃなくて普通の人間の城。
内緒なんだけど実は…私、この城に住んでるこの子が唯一のお友達なんだ。

そう実は私、「一応は」だけど友達がいたのです！
だって！何てったってこの子、私と同い年でな上にさらには生まれも同じ「地球」なんだよ？すごいよねぇ！
唯一違うのはこっちに来た年と境遇くらい……かな？

四才のときにファグアラネルに来てからはこのアスフォン国のお城で暮らしているらしい。
あ、あとこの子はハーフらしく黒髪じゃなくて薄茶の髪してるからファグアラネルでは魔の者とは思われないみたい。
いいなぁ……。私なんか真っ黒黒だから普通の人間に嫌われてるのにぃ…。
もちろんこの世界での唯一の女友達だから嫌うなんて出来ないし、恨んでも仕方がないことだってわかってるんだけどね。
はあぁ～……。

「う、うん。そう」
「さらには別れ際の会話で諦めるどころか火がついちゃったと？」
「……う、うん」
「その相手がもしも吏一君だとして、私だったら……どんどん責めちゃうなぁ。好きな人には見てもらいたいから！」

あ、吏一くんってのはこのアスフォン国の王様であり、彼女、依琉の幼なじみであり恋人らしい。
幼なじみ……つまり、王様も地球出身。彼もまた周囲には魔の者とは思われないみたい。
もともと髪は黒だったらしいんだけど、トリップしてからは色々あって今は髪の色は青に変異したらしい。
色々で青になるって一体何があったんだろう…？

でもでも、私たち二人と王様はたったの2つ違いなのに、もう王様なんてすごいなぁ。
てことは依琉はいつかは王妃様かぁ…。ロマンチックゥ！

「で、でも、依琉……。勇者様に、その気がなかったら…？」
「もし、吏一君が私を好きじゃなかったら……やっぱり、アタックするなぁ。まぁ私と吏一君は昔っから両想いだから、アタックする必要なんてないけどねっ！」
「…本当に相思相愛だね。時間になったら必ず迎えに来てくれるし、このバリアだって依琉のためだけに魔の者対策でわざわざ科学者の人達に作らせたんでしょ？」

『紅心の珠』を所持してるおかげなのか、はたまた人間の体のためかわからないけど、このバリアは何故か私には効かないみたい。いとも簡単にすりぬけることが出来る。
でもこの装置の設置のおかげか、兵士達は鍵を掛けるだけにしてこの部屋の中に入ってまで警備をしないし、装置の力で余計な魔の者もよってこないから彼女と二人っきりで話すことが出来ている。

「うん。でも本当は私が魔王と話すのもすごく禁止したいみたいなんだけど、私の願いを優先してくれてるのっ！やっぱり優しいなぁ、吏一君は！」

そう。この子も王様も私の正体を知っている。というかこの国でそれを知っているのはこの二人しかいない。
でも捕まえたり、殺したり、国中に口外したりしない。
私のことを王様は極秘にしてくれるらしい。

なぜかって？……「私を捕らえると依琉が悲しむから」、ただそれだけらしい。
それはつまり同じ星の出身であろうと、依琉が私を嫌えば即刻引き渡しってことに…。
ちょっと、ひどい…っ！

でも確かに、本来ならば捕まえて色々と調べたり勇者に引き渡したりするつもりみたいなんだけど、依琉から『私のお友達の魔王！なんと！私たちと同じ地球から来たんだって！吏一くんも仲良くしてね！』なんて目の前で恋人がキラッキラしたいい顔で言われたら断れないと思うんだよね…。
彼氏がいたことのない私でもそう思うし。

それからの私としては王様に会うたびに気まずい気持ちになるのに……。依琉は気付いてないのか無邪気に私のことを話すし、王様は王様でそのたんびに私を怨みがましい目で睨むし…。
どうせなら口で色々言ってくれたほうが楽なのに、全っ然喋んないんだもん。王様。
絶対あの目は打倒魔王としての目じゃなくて、ただの恋人を夢中にさせてる相手への嫉妬の目だ。
そして依琉はそれすらも気付いてないしぃ…！

「でも、別に話すだけならいいんじゃないかなぁ？向こうは別に敵意を持ってるわけじゃないんでしょ？」
「で、でも……。私と勇者様は、敵で…」
＜うじうじうじうじじれったいわねぇ…！＞
「好きな人に敵も味方もない！なんなら二人で愛の逃避行すればいいじゃないの！！」
「いやいやいや！おもいっきり関係あるし、魔の者は他の者の魔力を感じられるから私は絶対に見つかっちゃうよ！逃げれても殺されちゃうかもだし、私地球に帰ってやりたい目標があるし、それにそれに……勇者様に、拒否、され…たら……！」
「むぅ～……。あーもーっ！じれったいなぁ！話せっ！目と目を合わせて今すぐにでも話してこいっ！！」

ひぁ！依琉の口調が乱暴になった！
このままだと私はまた王様に睨まれることに…！
うぅ……別に、話すくらいなら……いいのかな…？

『ミオ』

依琉はいつも私を『魔王』って呼ぶ。
様付けで言うもんだから私の配下みたいになってしまったみたいに聞こえて、王様が私を睨む睨む睨む！
だからそれだけはやめてもらったんだけど、その呼び名の理由が「だって私にとって今まで『魔王』なんて絵本の中の存在だったんだよ？一生のうちに滅多に言えない言葉なんだから、今のうちに使っておかなきゃ損だわっ！」だからうらしい。
王様はもちろん他の人の誰も私の名前で呼んでくれないから、本当に私を名前で呼んでくれるのは勇者様ただ一人。

……早く、早く会ってもっと名前で呼んでもらいたいなぁ…。

くくすくす…。そんなに呼んでほしいんだぁ…。まぁ喜んでるあな

たのために、私もあなたを名前で呼ばないでおいてあげるわ。べつに他には聞こえないんだから「あなた」で不便はないでしょう？＞

…嬉しいような、悲しいような。なんだかふくざつな気分。

「う、ぅ……っ！…わ、わかった！が、がんばって勇者様とお話して仲良くなる！！」

いつも争って（正確には私が遊ばれて）ばかりなんだから、たまには話すくらい何でもないはずだよ！

「やった！がんばって勇者のハートをゲットだよ！？出会いの場は私が作ってあげるから！」

――　だがそれは正確には彼女ではなく王である彼の方がほとんど用意するはめとなっていた。

…城から帰った後。つまり私は自分の部屋にいた。
……私はずっと気になっていたことを、彼女に聞いてみた。

「……あの、話が流れてしまったんですけど…。あなたは、何者ですか？いつ頃から私の中に？」
＜…ひみつ、としか言えないわ＞

いや、すごく気になります。めちゃくちゃ気になります。
前触れもなくいきなり自分の中から知らない声が出たら普通びっくりする。

＜だってそうとしか言えないんだもの。でも、一つだけ…あなたと一緒になったのはあなたがファグアラネルに来てからすぐよ＞
「そんな前から！？」
＜笑いを堪えるのは大変だったわよ。時期が来るまでは隠れているつもりだったから。……ふふっ、あなたが魔の城の中で迷子になったり、寝てるときに勇者を名前を呼びながらよだれを垂らしたり、転移の失敗であの恐ろしいはずの厨房に落ちたり、あなたがおふ＞
「ひゃーっ！うぁーっ！きゃーっ！やめてーっ！！」

それ以上あの忌まわしいことを思い出させないでーっ！

＜これからが面白いのにぃ…＞

「もういいですっ！この話はこれでおしまいっ！はいっ！お休みっ！」

これ以上恥ずかしい思い出を掘り返されてなるものかっ！

＜……こんなことでごまかせるなんて…。単純な子で本当によかったわ＞

○アスフォン国（2）（前書き）

お久しぶりです。
また更新は遅めですが、よろしくお願いします！m（__）m
久しぶりの投稿なのにいきなり説明ばかりです汗

○アスフォン国（2）

「それではさっそく出発しますよ～」
「お～ぅ！」

ベタの言葉に元気よく返事したのはレイシューだけ。

「みんな、へんじは～？」
「「「……」」」

すごく嫌そうな沈黙と、怒りすぎての沈黙と、考えにふけってそれどころじゃない沈黙と、……長い長い長すぎる説教に耳を痛めた上に寝不足で返事をするどころかめんどくささ感が明らかに出ているであろう沈黙。
仮定なのは主観的であって客観的ではないからだ。
ちなみになんであいつが怒っているのかというと昨夜の魔王のことを話したため。
失踪したはずのレイシューのことを他のやつらに説明するにはフィアナもいるのに魔王のことをなかったことにするのは確実に無理なことだった。
……まぁ魔王の、いや、ミオの名前を知れたんだ。これくらいの痛手だけでもよしとするか。

と、考えてるとレイシューがこっそりと俺に話しかけてきた。
身長差がありすぎるので仕方なく抱っこしてやることに。見た目は男のように見えるが、レイシューは身体も中身も完璧に女であり、

旅で少し鍛えられたのか子供にしてはとても軽い。
今こいつはなんかすごく言いたそうな顔してやがるし、顔からしてどうも他の奴らには内緒の話のようだ。

「勇者は、魔王がすき？」

……フィアナもレイシューもそうだが、なぜうちの女性人は的を確実に当ててくるのだろうか。
それと唐突すぎる。
昨日ミオと何か話したのだろうか？

…あぁそうですよ。好きですよ。
それの何が悪い。いや魔だから悪いのか。
ともかくまさかお前までもフィアナ同様なんか言うんじゃないだろうな。
俺がなんとも言わなかったせいか、レイシューは勝手に一人で理解したようだ。

「よかった！少なくとも勇者が魔王をきらいじゃないのには、あんしんした！」
「…何でお前が安心するんだ？」
「ひみつー！…もっともっと魔王をすきになってくれる人がたくさんいたらいいのにね」

いや、それはそれで俺が困るんだが。
魔王の味方がいるのは良いがそれが恋愛感情ではすごく困る。

……ん？

「お前そんなに魔王の肩を持っていたっけか？」

ベルガほどじゃないが何となく軽い戦意を持っていた気がするが…。

「……うん。なんだかよくわかんなくなっちゃったけど、今はどうすればいいのか、なんとなくわかる。たぶん、フェイルと一緒だと思うっ！」

……子供らしくないこいつが考えたんだ。
ただの軽い発言とは思わないほうが良さそうだ。
それに今の発言でこいつは魔王の敵ではなくなったと思う。

「……レイシュー、忠告。昨日何があったか知らないが、それはベルガやフィアナには絶対に言うんじゃないぞ。」
「リッツェルやフェイルには？」
「あいつは興味もたないだろうが、一応言わないどいとけ。…俺も詳しくは聞かないよ」

レイシューにうまく説明できるとは思えないし、……レイシューの心境を変えた何かがあったのだろう。
何となくだがそれを無理に詮索しないで二人だけ話にしたほうが良さそうな気がする。

「レイシュー、俺との約束だ。昨夜のことは魔王とお前だけの秘密。今してる話のことは俺とお前だけの秘密だ」
「男と男の約束だね！」

……うん？
まぁいいか。訂正はめんどい。

「……私は、納得いかないわ」

レイシューの次はフィアナか。
次から次へと…。特にフィアナはしつこいやつだな。
位置的にも俺達の会話は聞こえなかったはず。
たぶん自慢の勘と憶測でだいたいの会話の背景を読み取りやがったな。

「でも……、私は見なかったことにするのよ」
「…それは、見逃すということ」
「断じて違うわ。私は毎回毎回都合よくあなたと魔王のことについては気付いていない、ということにするのっ！もうこれ以上聞かな

いでよっ！」

……よくわからんやつだ。
まぁ、いい方向にいった…のか？
よくわかんねえ。

『魔の者を退治してくださった勇者様一行』を村人達は村の出口まで見送った。
なんて都合のいいやつら。

「着くまでの間にぃ、アスフォン国について簡単に説明しますね～」
「確か…１７の少年が国の王なのよね？どうしてそんなに若いのかしら？」

確かに。
１７だとまだ子供にすぎない。

本来なら親が王となり国をおさめているはずだ。

「そう聞いてくると思いました～。手っ取り早く説明するためにも、このベタが絵本や書物から資料を作ってきたのでご参照ください～」

さっき渡された紙か…。

……色々な話が混ざってて、なんかすごいことになっているな…。

＊＊＊＊＊＊＊

作成者ベタによるアスフォン国の歴史。

――アスフォン国物語（一部より）

その昔ドラゴンがいました。

その昔人間の王様がいました。

その昔それはうとまれていました。

その昔それはたたえられていました。

それはその姿がきょういだからです。

それはそのくらいが偉いからです。

それは人々を襲うであろうからです。
それは人々を助けるであろうからです。
人間は正しき者と悪しき者を創りたかった。

だから、

たとえ、そのドラゴンが寂しがり屋で森の奥で暮らしていたとしても。

たとえ、その王様が裕福な暮らしをしていて、まわりに人が沢山いたとしても。

たとえ、そのドラゴンが人を愛していても。

たとえ、その王様が戦を愛していても。

人間がその差を知ることはなく、知ったのは全てが終わるその時でした。

――アスフォン国のお話し～残酷な絵本（一部より）

ある日おうさまはいいました。

「ひがしのもりへドラゴンをかりに行こう！」

おうさまはたくさんのへいしたちをつれてしゅっぱつし、はんつきもしないうちにボロボロになった大きなドラゴンをしろにつれかえりました。

たくさんの人がよろこび、おうさまはより人びとにすかれていきました。

べつの日、おうさまは考えました。

「あのドラゴンをどうしよう？」

きずついたドラゴンは、ちかしつでつかまえています。

なやんだおうさまは、

「そうだ！みんなにないしょでどれいにしてしまおう！」

その日からドラゴンは、くらいくらいちかしつで、たいへんな力しごとをまいにちさせられました。

ドラゴンがほんきになればすぐににげられるのにドラゴンはしません。

さびしがりやなドラゴンは、きずついても人びとのやくにたてることに、とてもよろこんでいます。

あわれでやさしいかわいそうなドラゴンがはたらくことで、この国がゆたかになるのに人びとはまだきづきません。

――アスフォン国のある古い日記（一部より）

驚いた。まずその一言しかでない何から話せばいいのかわからない。そう、ドラゴンだ。どこからかわからないが空にあの時のドラゴンがいた。そのドラゴンが次々と敵の兵たちを倒していく。

あの王は死んだ。当然の報いだ。
自身の欲求のままに国民の意見も聞かず勝手に強靭な隣国に宣戦布告したのだから。
当初、強い王にみんな、もちろん俺も喜んだが俺達民を巻き込まないでくれ。
息子も親父も死んでしまった。お袋は兵の看護をしたために過労で死んだ。俺にはもう妻しかいない。
人間を殺して生きなきゃいけねえんだ。
そう考えて戦っていたときに目の前に武器をかまえた屈強な敵兵と鉢合わせになってしまった。
無理だ。弱いやつでも手がいっぱいなのに稽古をしたことのないただの大工である俺があんなやつに勝てるわけがない。

死んでしまうのかと思ったその時だった。
へたりこんだ俺の頭上を白くでかい何かが通過し敵兵を跳ね飛ばした。
そう、人形をおもいっきり投げたみたいに。
それはしっぽだった。
気付けば目の前にまでドラゴンが迫っていた。あれほどまでの存在感があるのに気付かなかったんだ…。

――ドラゴンがのこしたモノ（一部より）

ドラゴンは戦った。それこそ死に物狂いで。
自身は王によって人々が見たときよりも痛々しい身体になっていたのに。人々のために。国のために。己が朽ち果てる覚悟で。力の限り兵達を守り、出来る限りの力で戦いを終わらせようとした。
結果をだけをいえばドラゴンは生き延びた。兵も国民も予想外の大多数が助かった。
ドラゴンは一つの国を救ったのだった。
その後、ドラゴンは王になり、人間と恋に落ちる運命になる。

ーーーアスフォン国の始まりだった

＊＊＊＊＊＊＊

「……つまりなにか？王は『ドラゴン』だとでも言うのか？人間でも人狼でも魔の者でもヤータでもでもマイマイガイでもラギデキザルでもラッカラトでも何でもなくその他の生物でもなく伝説にしかないあの『ドラゴン』？」

「実際に存在したなんて聞いたことがないぞ？」

ありえない。

本にはよく登場するあれが実際にいたのなら世界中が大騒ぎになっているはず。

だが、実在するという話はない。

ドラゴンがいるのなら神だっていていいはずだ。

「えぇ、だって一般人は基本的に知りませんし、秘密ですからね～。勇者様だから特別に教えてるんですよ～？それにリイチ王以外のドラゴンは何千年も前にすでに絶滅してしまっているので知るすべはないでしょう～。ですので王の代は初代を除いて全て人間とドラゴンのハーフですよ～。ちなみに姿はどちらにも変えられます～」

なぜ１７歳で既に王なのかを再度問うと１２年前に前王が人間の寿命により亡くなったため、５歳の頃にはすでにリイチ王は即位していたらしい。

「そんな馬鹿なっ！たった５歳の子供に国を治めるなんて無理だっ！！たとえ周囲が補佐をしたとしても他国に襲われ直ぐに滅ぶに決まってる！！なのに何故無事なんだっ！？」
「それが出来たんですよ～。…取っておきの、秘策で～」
「秘策…？」
「はい～！幼少のイル様からリイチ王に可愛らしく『がんばって！』と、言わせるだけでいいんです～！」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……？」
「イル様とリイチ王は５歳の頃から幼なじみなんですよ～。つまりリイチ王は昔からイル様ラブですのでたった一言の声援だけで、そりゃあもうとてつもない頑張りをみせましたよ～！……５歳でも、国が成り立ってしまうほどに…」

…もし、大好きな恋人を奪われた時、ドラゴンははどうなるのだろうか。
俺達の理想のドラゴンの姿は打ち砕かれ、もはや何も言えなかった。

○アスフォン国（2）（後書き）

やったー！長くなったー！

・・・と思っていたのにここで区切ることに

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9639m/

魔王は想う、勇者は求む

2011年9月29日02時05分発行